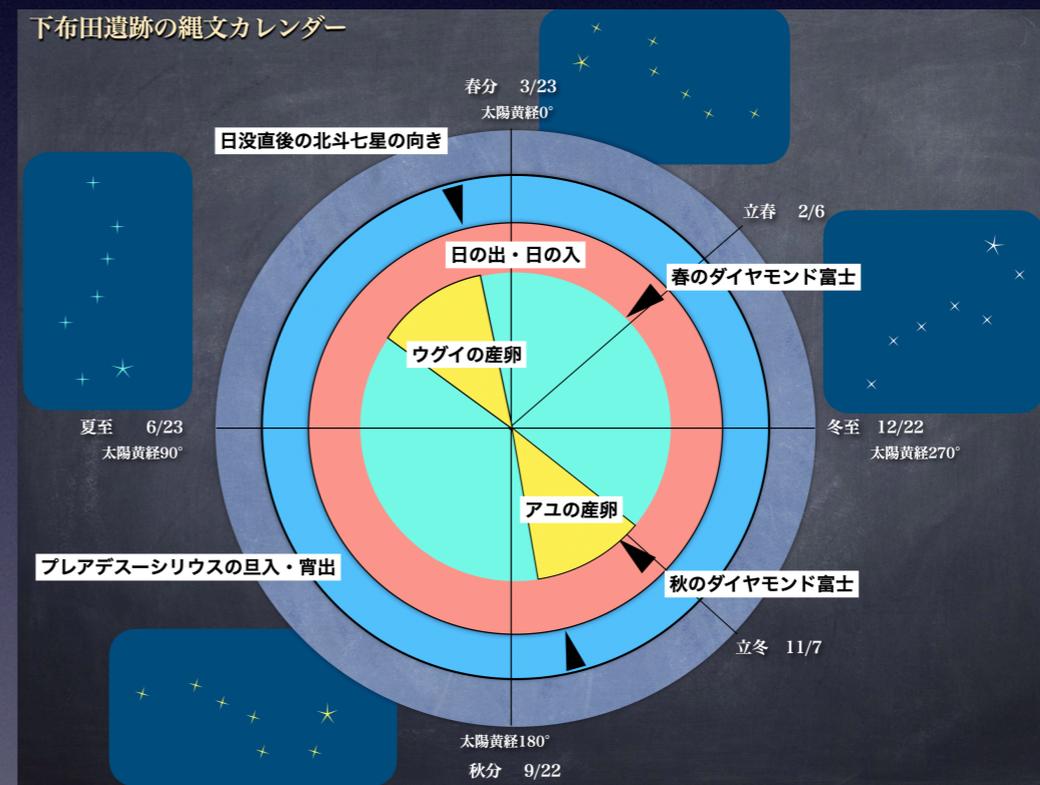


# 縄文カレンダーの再構築をめざして

—調布市下布田遺跡を素材に—



東海大学 文学部歴史学科 北條芳隆

# 暦の歴史に関する私のこれまでの探求

弥生時代の日の出・日の入り暦の復元

独自の太陰暦が採用された可能性

暦は支配者層（村長など）に独占された  
一般民衆は支配者から暦を教えられる関係

現在の我々は自然界とくに天体現象に無頓着になっている  
狩猟採集民は自然現象への総合知を備えていた可能性

対極にある縄文時代の暦

# 本日の構成

1. 日の出暦の仕組み
2. 弥生文化の日の出暦とその東遷
3. 日本列島独自の太陰暦が使用された形跡
4. 縄文カレンダー論と縄文ランドスケープ論
5. 縄文自然暦の提唱
6. まとめ

お手元の資料にほぼ全文を掲載しています

# 日の出と日の入りの情景に抱く想いと方位観



日の出の方角

「日向かし」 → 東

未来・これから・希望

正の方位・陽



日の入の方角

「去にし」 → 西

過去・これまで・反省

負の方位・陰

「し」は風向きや方角を示す古語

# 太陽や月の運行にかかわる古語の数々

|           |   |   |                                 |
|-----------|---|---|---------------------------------|
| 日向かし      | → | 東 | 太陽の出没が東西方位の語源<br>(南北方位を示す古語はない) |
| 去にし (往にし) | → | 西 |                                 |

古い大和言葉

現代の日本語 (古典を含む)

日読み [かよみ] → 暦 [こよみ]

暦は太陽の動きを「読む」ことからくる

月読み [つきよみ] → 月読 [つくよみ]

月の満ち欠けと出沒を「読む」ことも重視された

日知り [ひじり] → 聖 [ひじり]

太陽の動きを知る人物が聖人として崇められた

# 三輪山から昇る冬至の太陽

奈良県田原本町 唐古・鍵遺跡



2013年12月25日午前7時10分

弥生時代の人々に冬至の朝日が特別重視された証拠

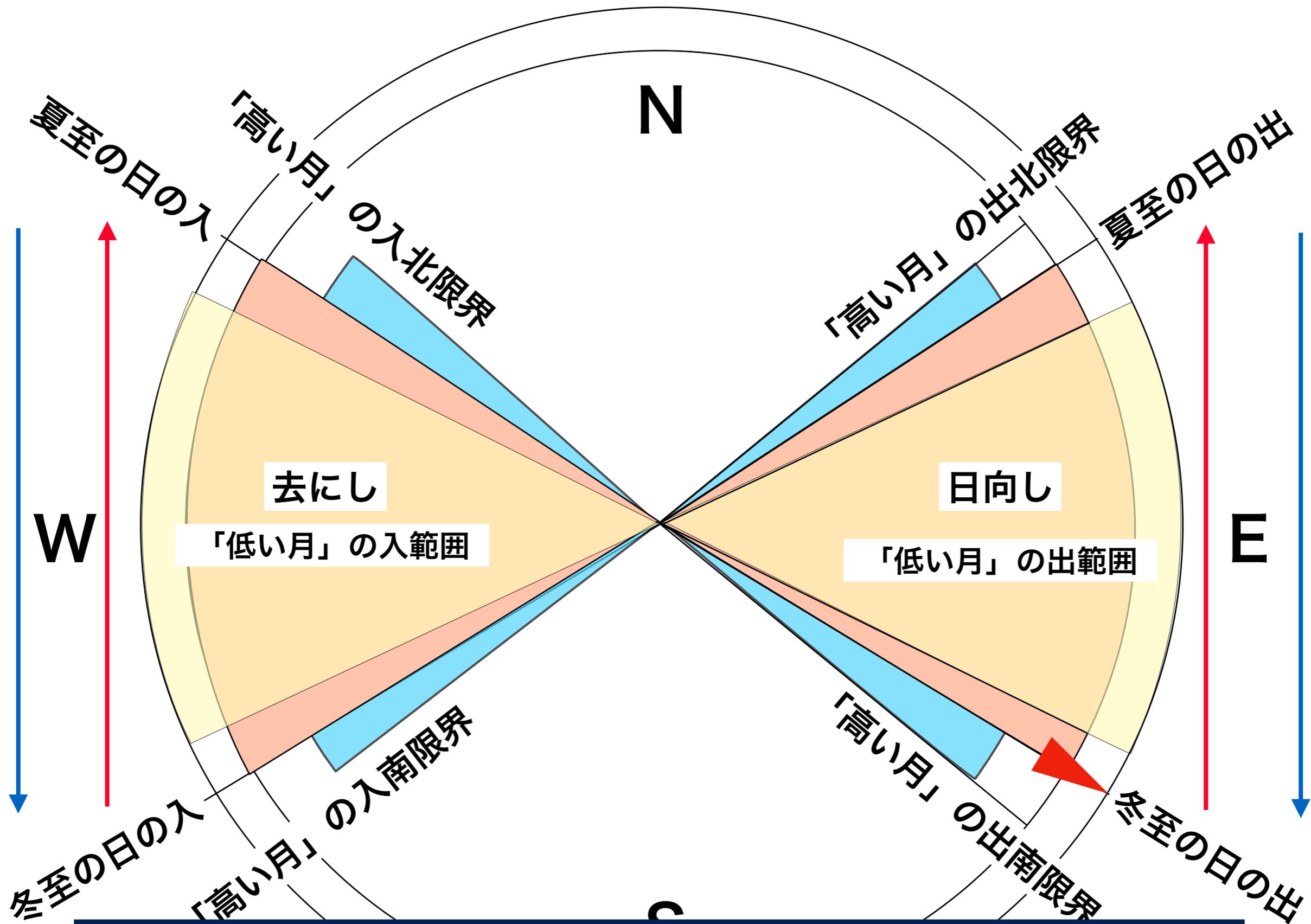
# 冬至の朝日に正面を向ける前方後方墳

長野県松本市 弘法山古墳



冬至の祭りは世界各地にみられる現象. 暦の基準も冬至であった

冬至の朝に照準を定め王の埋葬祭を執りおこなった証拠



日の出と日の入りの方角の季節変化を測る  
 「日の出・日の入り暦」

## 2. 日の出暦の復元

## 3. 日の出暦の東遷

中国龍山文化後期の陶寺遺跡で発見された天体観測施設  
日の出・月の出暦計（前2,300年頃）

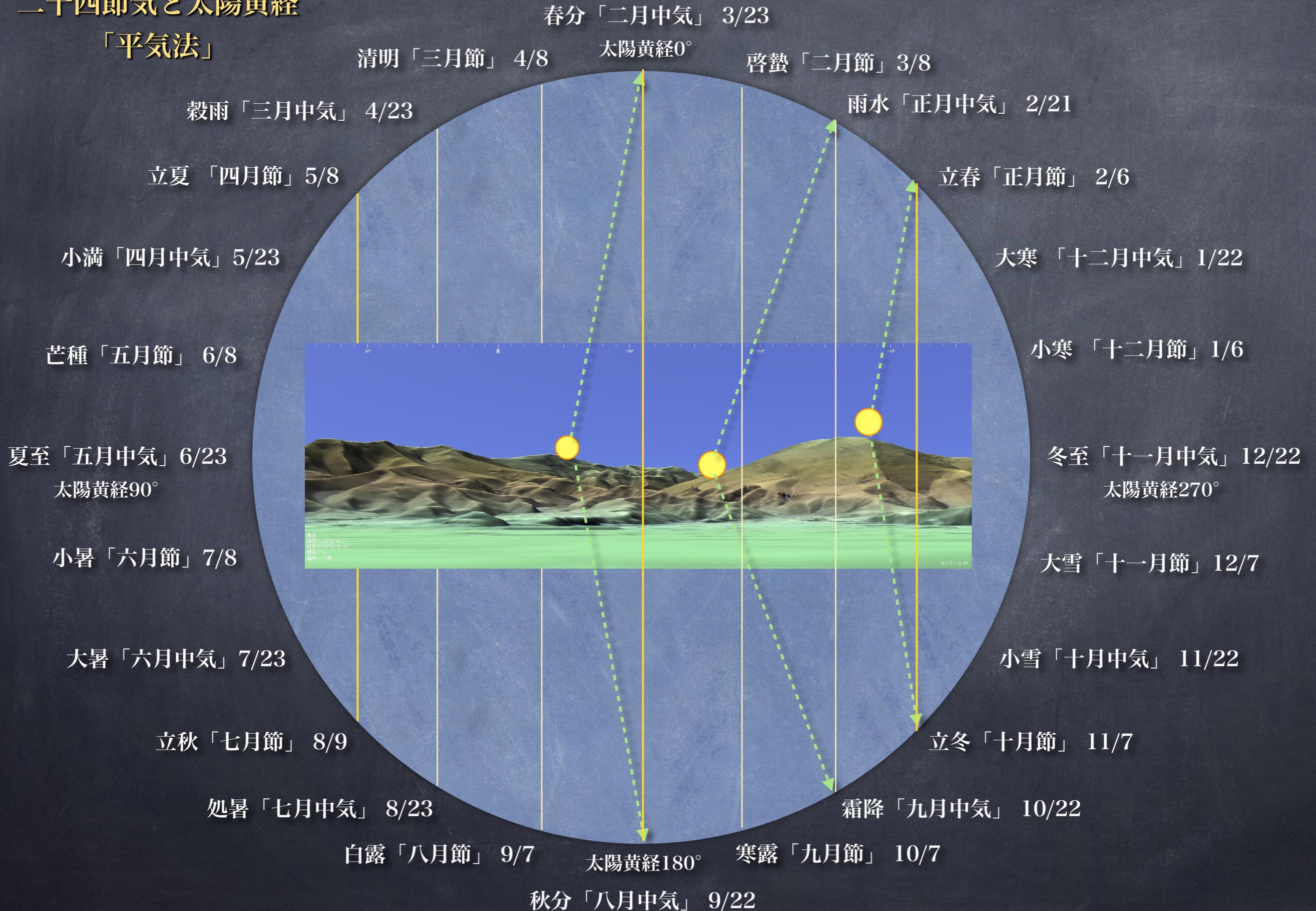


柱間の隙間から差し込む太陽や月の光を手前の分度器にて定点観測

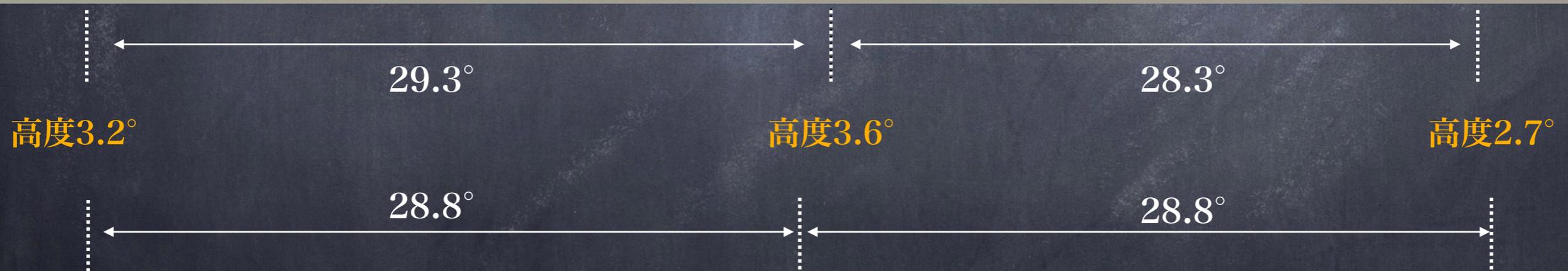
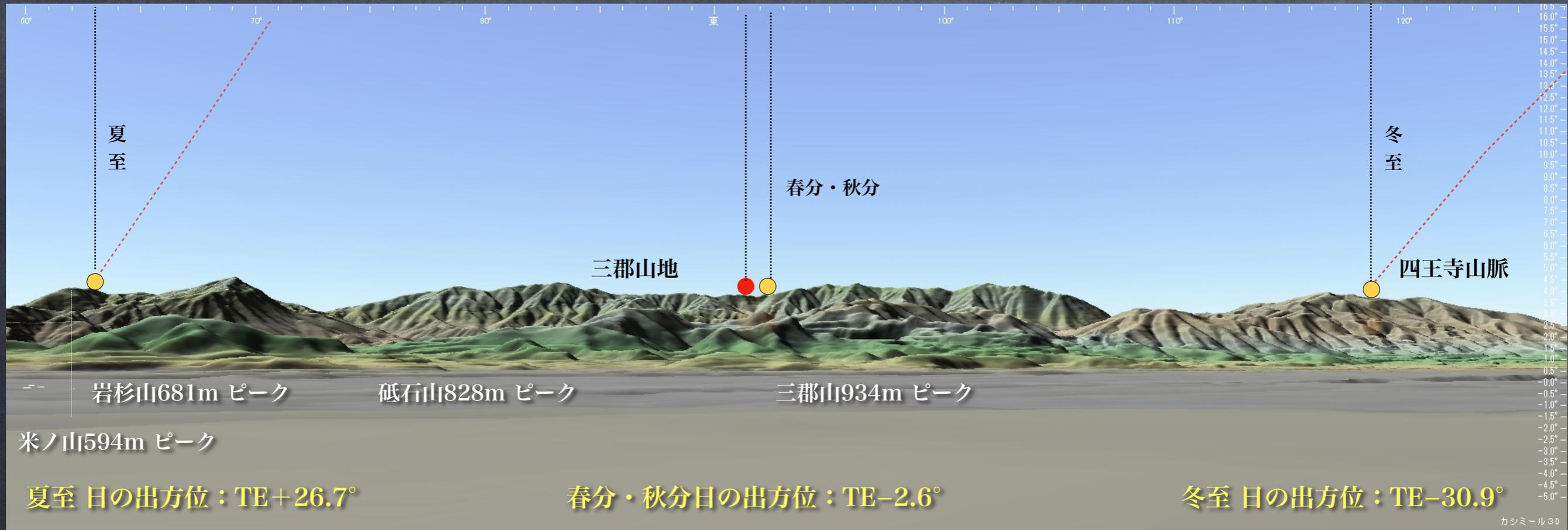
# 日の出暦の概要 (奈良県纏向遺跡)

## 二十四節気と太陽黄経

「平気法」



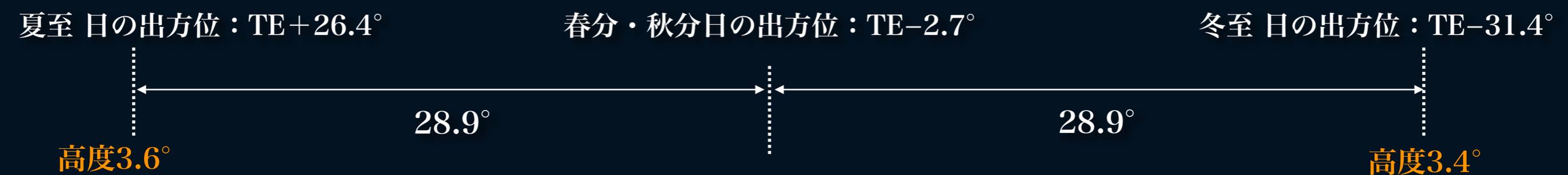
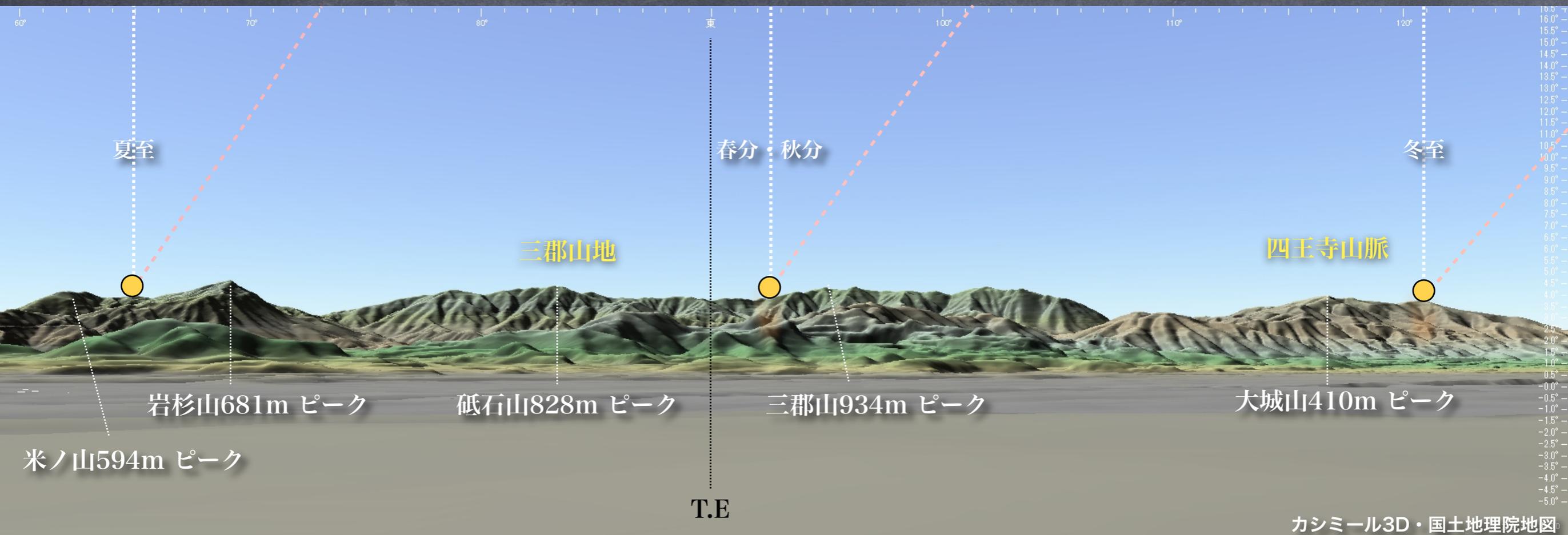
# 板付遺跡早期建物群からみた年間の日の出暦（前600年）



空間上の〈春分・秋分〉日の出方位 :  $TE-2.1^\circ$

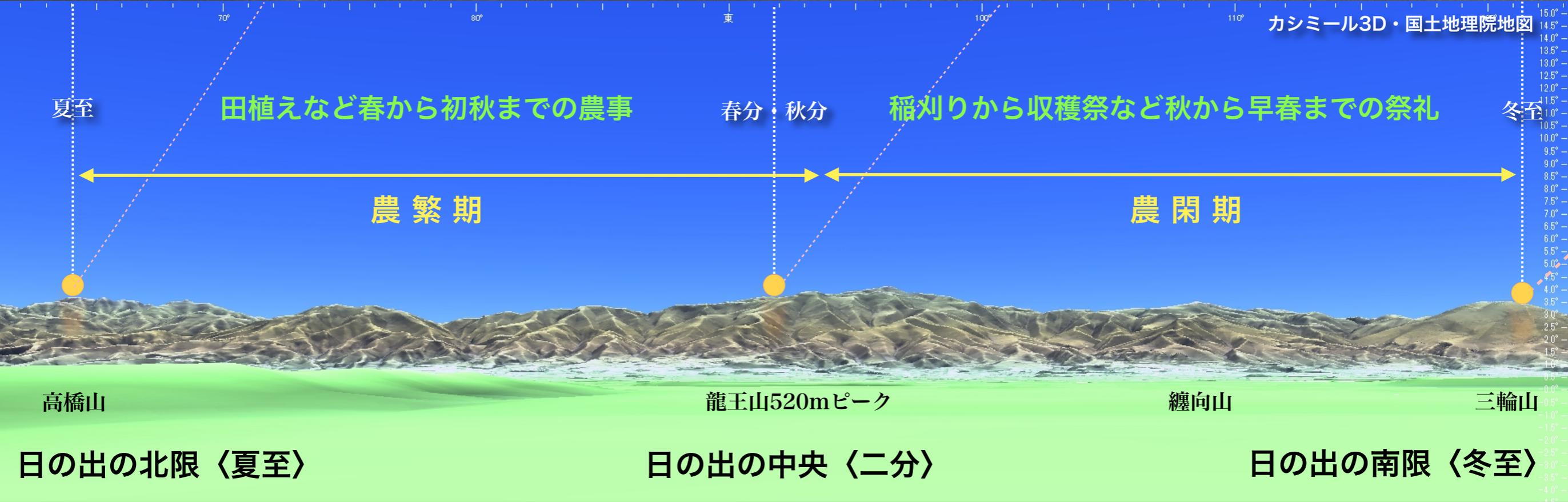
定気法による春分の3日後、秋分の3日前

# 板付遺跡 前期環濠集落からみた年間の日の出（前500年）



冬至の太陽や四王寺山脈大城山の南側の峰から、夏至の太陽は米ノ山-岩杉山間の鞍部から昇る。また最高峰の三郡山北斜面の鞍部から春分・秋分の日の出となる。空間上の冬至-夏至のちょうど中央値となる点が注目される。現在の定気法による春分の設定であるが、この情景が偶然の一致とはみなしえない。

# 唐古・鍵遺跡 新相建物からみた年間の日の出（前100年）



唐古・鍵遺跡から見た龍王山の一带は水源地の嶺でもあり風水にも叶う景観



古相の大型建物（復元模型）



2013年春分前々日の日の出



2013年冬至（12月25日の日の出）

# 愛知県朝日遺跡出土壺と弥生時代の太陰暦

12個の赤い円文と12個の黒い円文が全周に配される

1年間を12分割した暦が推定できる

上段の円文は「冬至の太陽」と仮定

下段は「二十四節気」の配列とも似るが等間隔の配列ではない

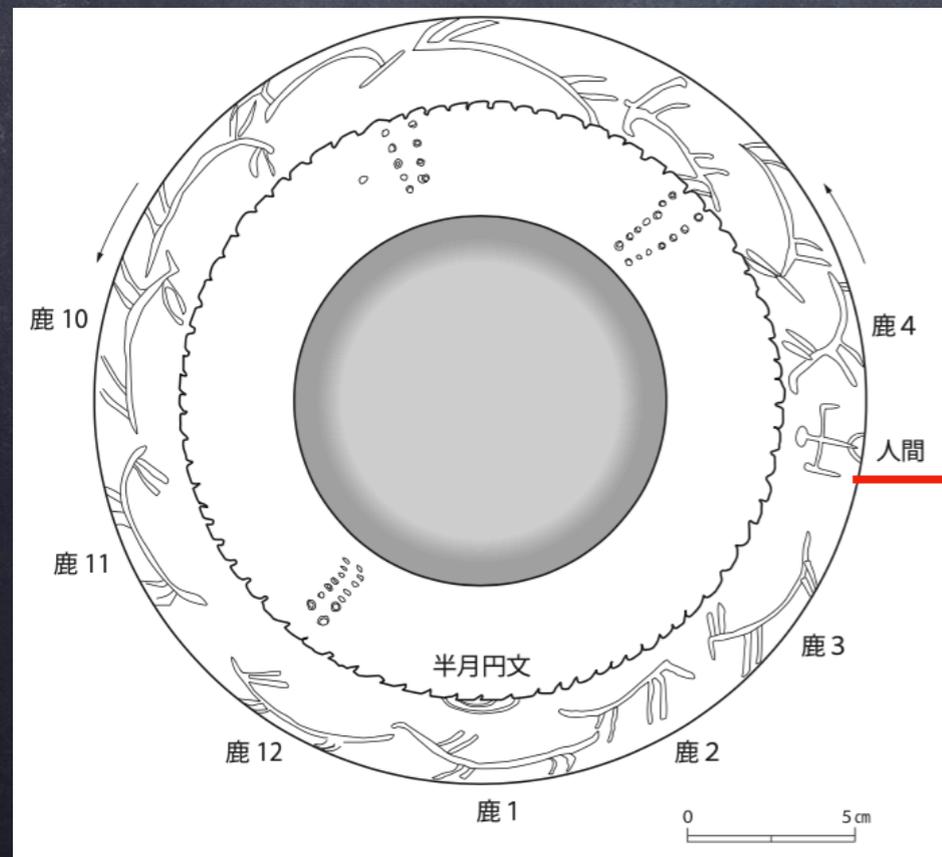
下段の赤円文は満月で黒円文は新月（朔）とすれば十二朔望月として解釈可能



# 鹿絵壺によって裏づけられた弥生文化の太陰暦

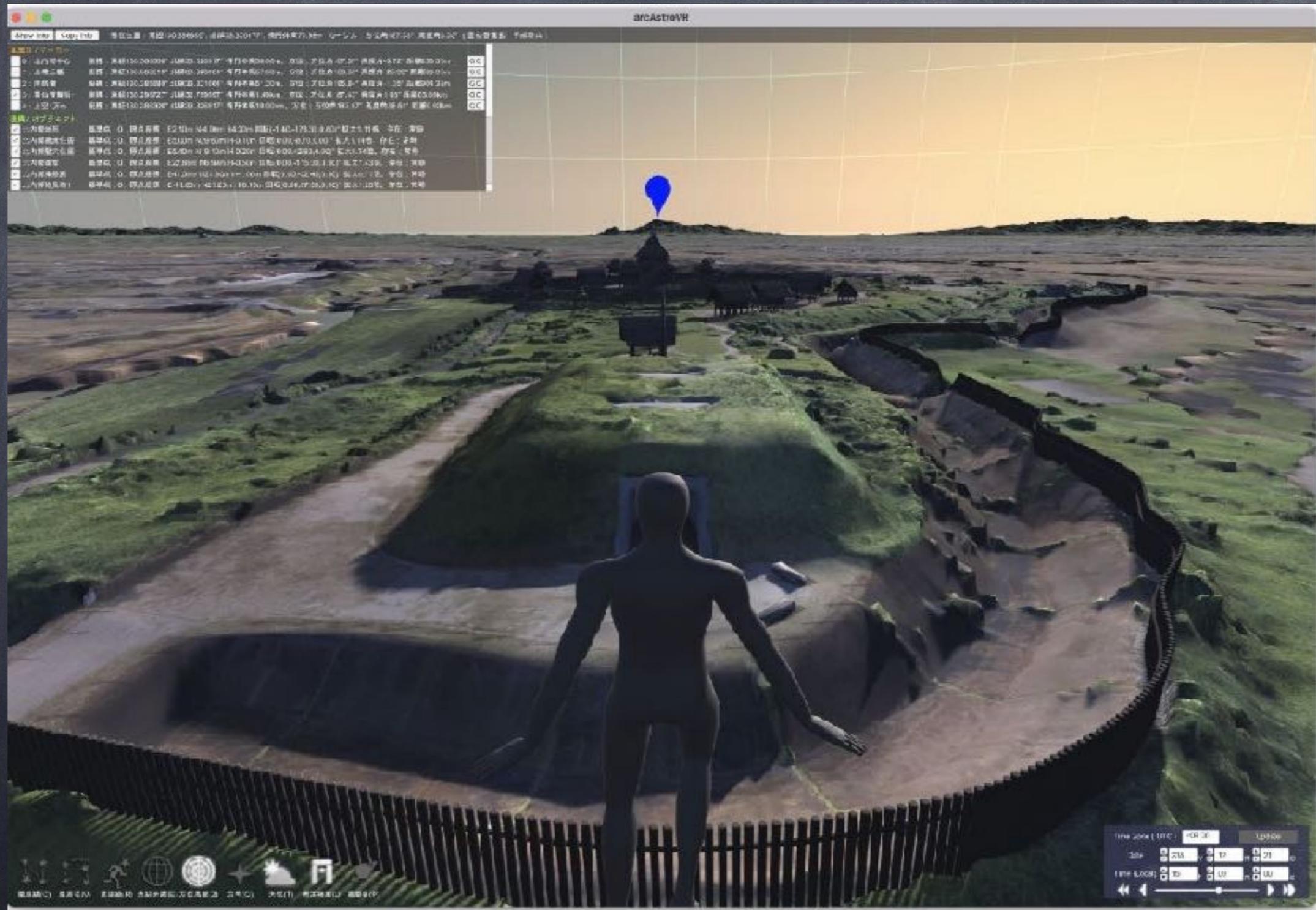


満月と新月 → 朝日遺跡



鹿と農事 → 八日市地方遺跡

# ここで9分間の映像をご覧ください



# 4. 縄文カレンダー論と縄文ランドスケープ論

「縄文カレンダー」論（小林達雄氏提唱）は、この時代に利用された暦の実態に迫ろうとするものではない

「多角的狩猟採集経済の社会」（鈴木公雄氏提唱）を分かりやすく読み替えた標語に近い



季節変化の指標はなんであったのかは解明されていない…

のちに小林氏は「日の出暦」であったとするが…

# 「縄文カレンダー」論から「縄文ランドスケープ」論への転換

経緯：小林氏は1994年、英国ケンブリッジ大学に滞在しストーンヘンジと夏至の日の出の関係を知る→考古天文学の議論にヒントを得て縄文時代の環状列石の再評価を始めた

## 小林達雄 「縄文カレンダー」論

動植物に対する生態学的な知識の総合

## 小林達雄 「縄文ランドスケープ」論

日の出・日の入暦を重視する姿勢への変更

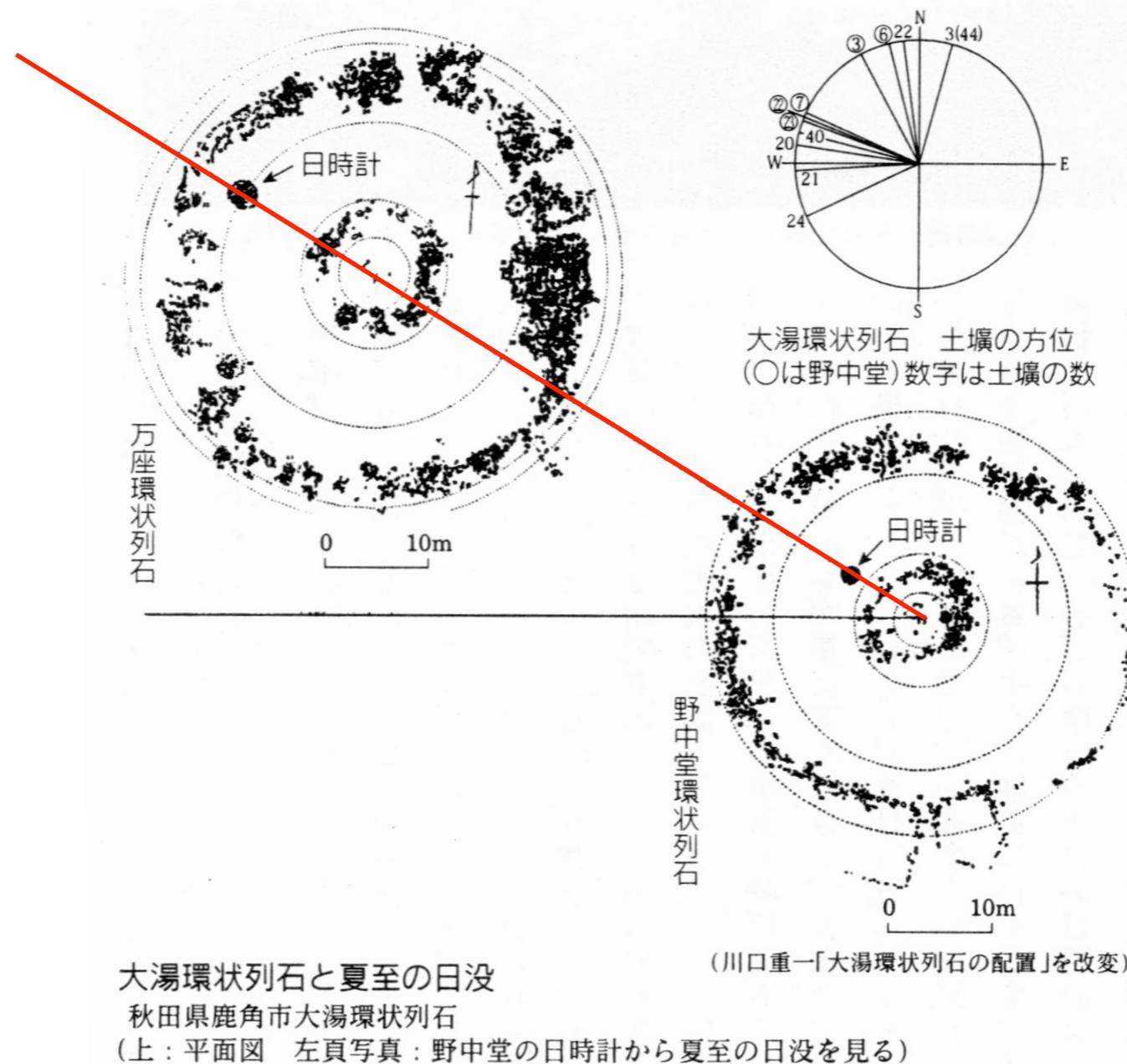
「かねてから私は、縄文人は実は方位の観念を身につけ、ひいては天体運行を観察していたのではないかと秘かに考えていた。最近、類例が集まり、現在ではまず間違いないと確信するようになった」（小林1996,215頁）

# 修道士の踵（カカト石）は夏至の日の出の視準点



# 小林達雄「縄文ランドスケープ」論の問題

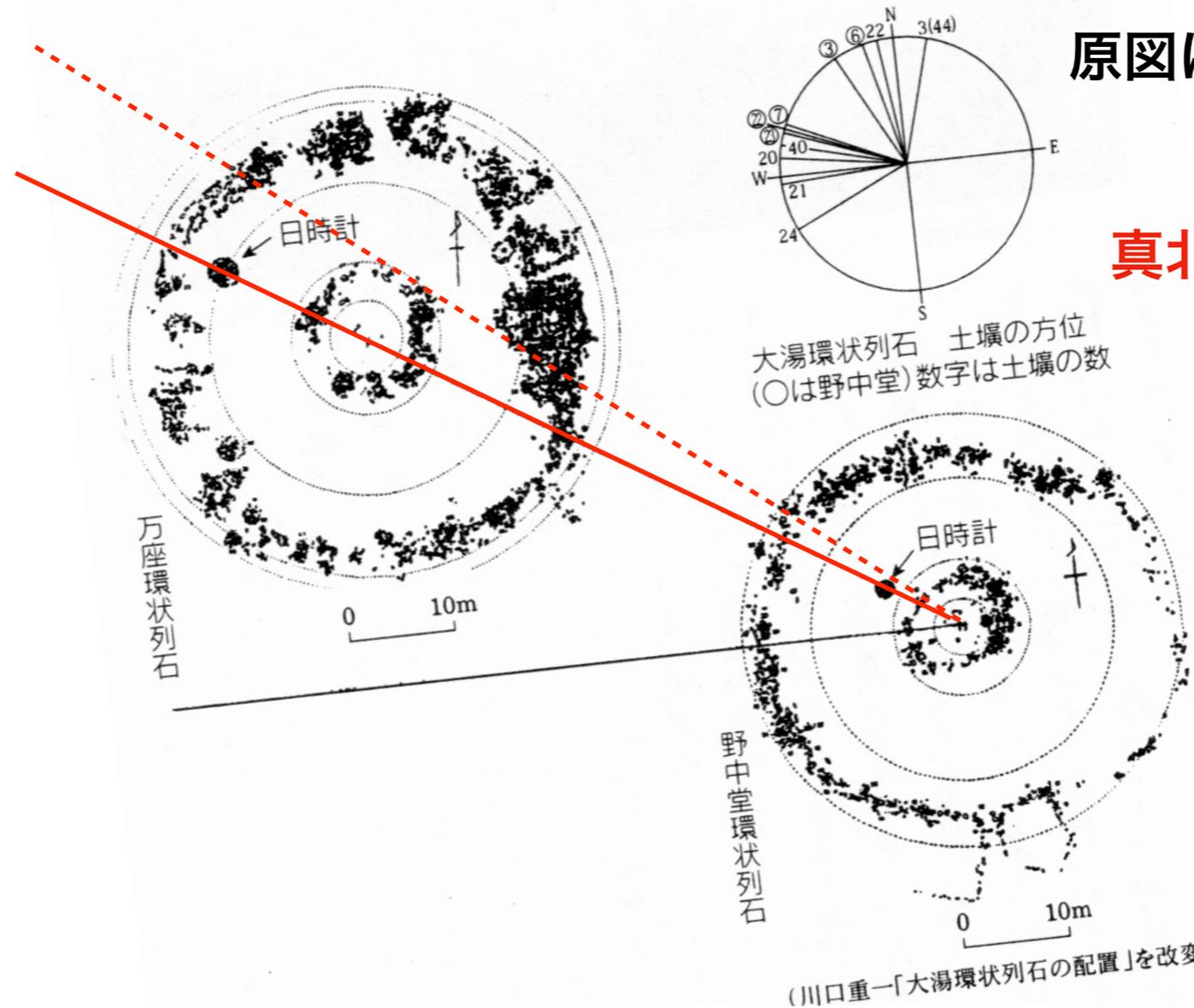
## 秋田県大湯環状列石は夏至の日の入りとは対応しない



しかし夏至や冬至との関係が重視される方向で議論は進む

# 小林達雄「縄文ランドスケープ」論の問題

秋田県大湯環状列石は夏至の日の入りとは対応しない



しかし夏至や冬至との関係が重視される方向で議論は進む

# 5. 縄文自然暦の提唱

動植物全資源の生態的特徴を、視認しやすい天体景観の移ろいと組み合わせて認知し、総合知とした縄文人（多角的狩猟採集経済の実態）に迫る

## 市民の有志の方々によるこれまでの活動実績

① 下布田遺跡からみた年間の節目となる期日の太陽の観察

日の出・日の入り暦との関連

② 下布田遺跡から観察されるダイヤモンド富士の撮影

印象深い日没の情景を季節変化の指標として活用した可能性

これまでの実績を基礎に、縄文人は星座と太陽と月を活用して季節変化を捉え、川の幸や山の幸の到来との関連性を捉える下布田遺跡固有の自然暦を組み上げた可能性を探る

# 調布市下布田遺跡の立地と周辺景観



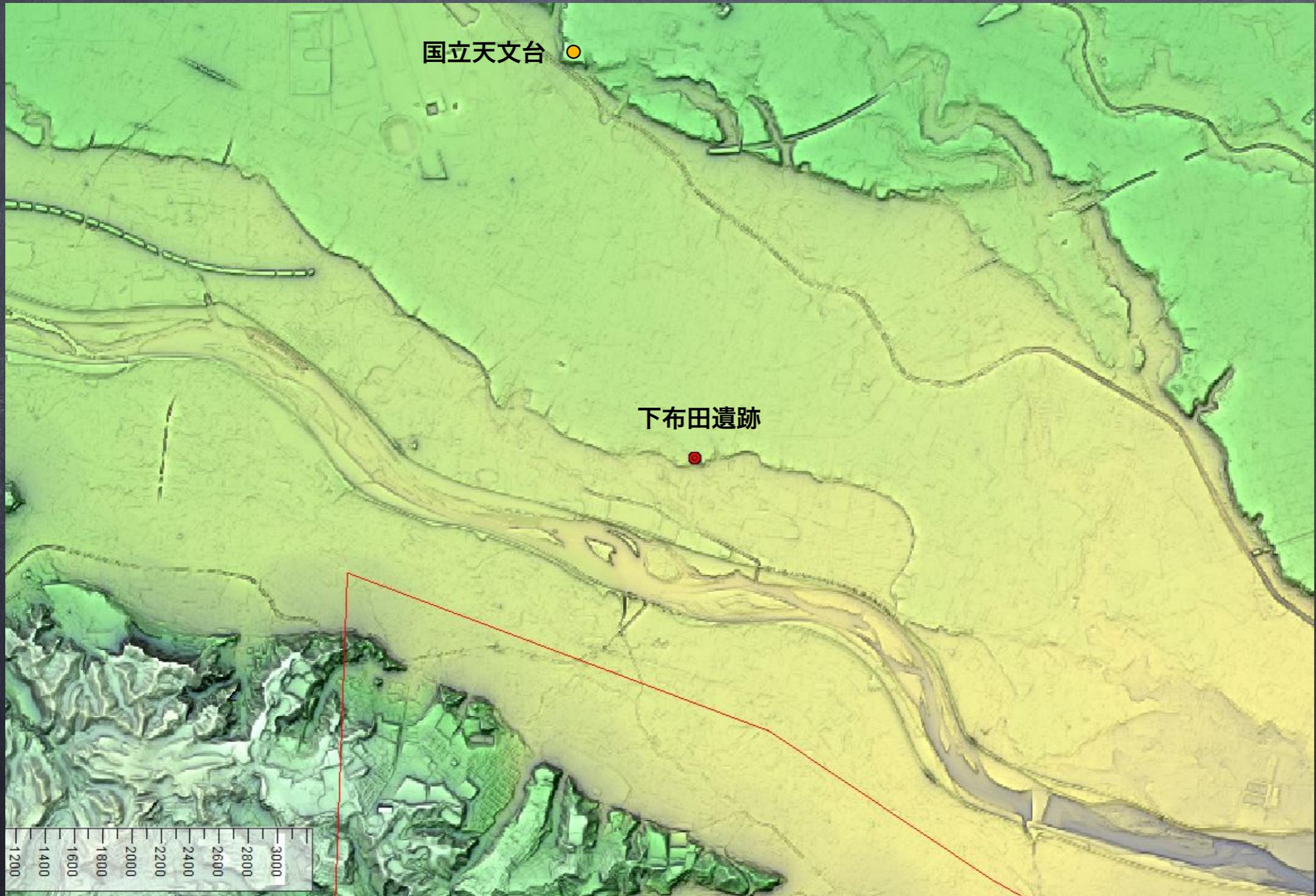
遺跡から東側をみる



遺跡から富士山をみる（真西から22度南）

# 調布市下布田遺跡の立地と周辺景観

多摩川左岸の河岸段丘端に位置し、東西への眺望は比較的優れている



# 調布市下布田遺跡を題材に縄文自然暦を再構築する

## 「自然暦」の基本原則に立ち返る

季節変化の指標となりうる全要素が候補（資料7頁）

- ① 日没直後の北斗七星
- ②-a プレアデスからシリウスまでの4星（団）の旦入と旦出,宵出
- ②-b 富士山に沈むシリウス
- ②-c 冬季の未明に輝いた南十字星
- ③-a 太陽の出没点の移動（日の出・日の入り暦との関連）
- ③-b ダイヤモンド富士・富士山の冠雪
- ④ 月の満ち欠け（太陰暦・月の若水信仰との関連）
- ⑤ 風向きの変化
- ⑥ 気温の寒暖差と降水量の変化
- ⑦ 山谷に咲く花々や昆虫の発生,鳴き声

認知の順序



# 調布市下布田遺跡を題材に縄文自然暦を再構築する

①～④ の天体景観については縄文時代晩期に揃える必要がある

地球の自転軸の変化 = 歳差運動

自転角度の微細な変化 = 黄道傾斜角の経年変動

この時代の北斗七星は周極星（1年を通して沈まない）

プレアデスなどの恒星群は出没地点が大きく変わる

この時代には南十字星がはっきり見えた（冬季）

夏至と冬至の太陽は現在より出没範囲が約1個分外側

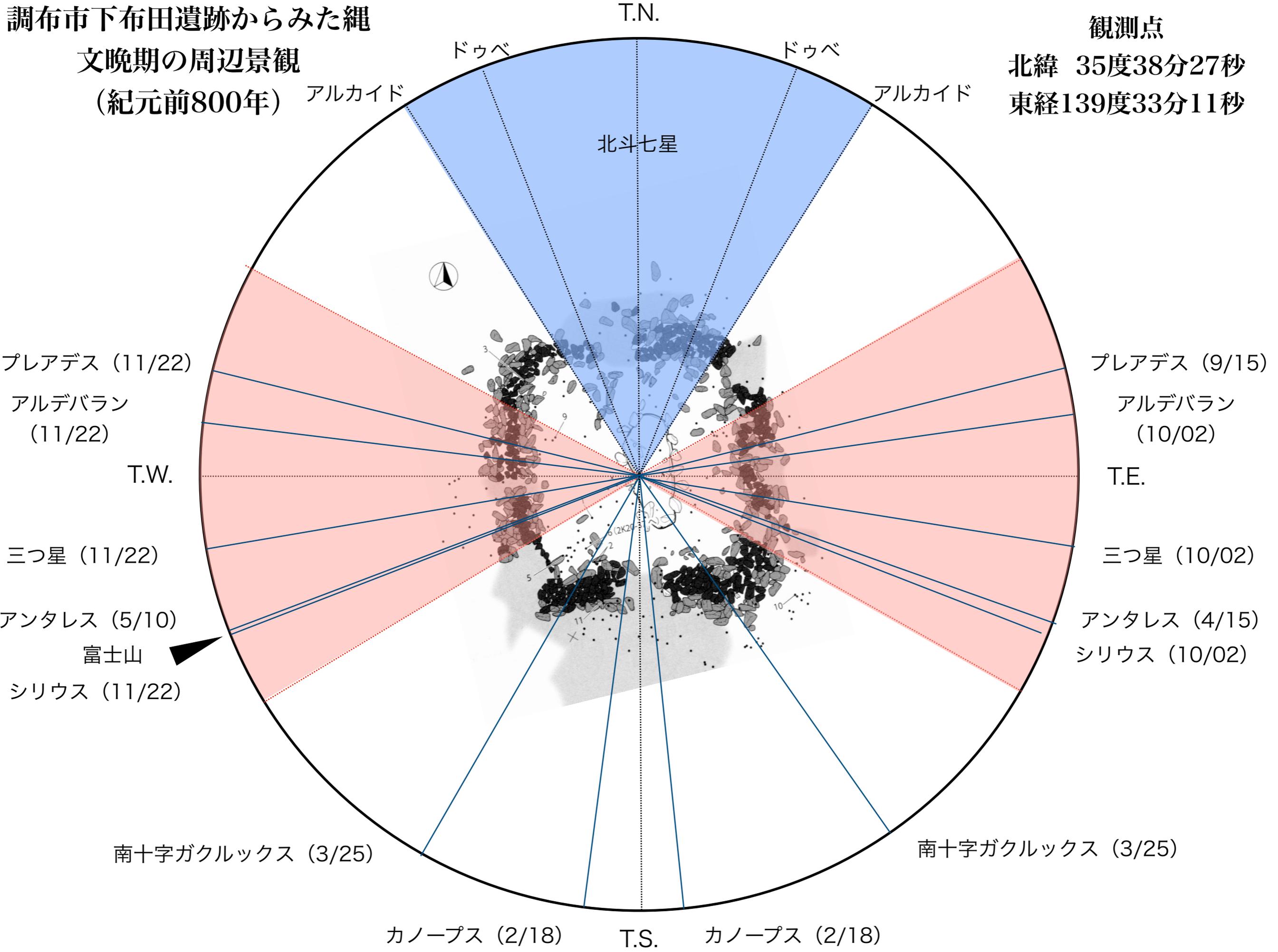
月の出没範囲も太陽に連動して南北に約1個分広い

# 調布市下布田遺跡からみた縄

## 文晩期の周辺景観 (紀元前800年)

### 観測点

北緯 35度38分27秒  
東経139度33分11秒



# 縄文晩期（紀元前900年–上段） と現在の日の入り方位（下段）



冬至の日の入り:T.W-31.36°

夏至の日の入り : T.W+28.54°



冬至の日の入り : T.W-30.71°

夏至の日の入り : T.W+27.99°

# 立春と立冬の目安となるダイヤモンド富士

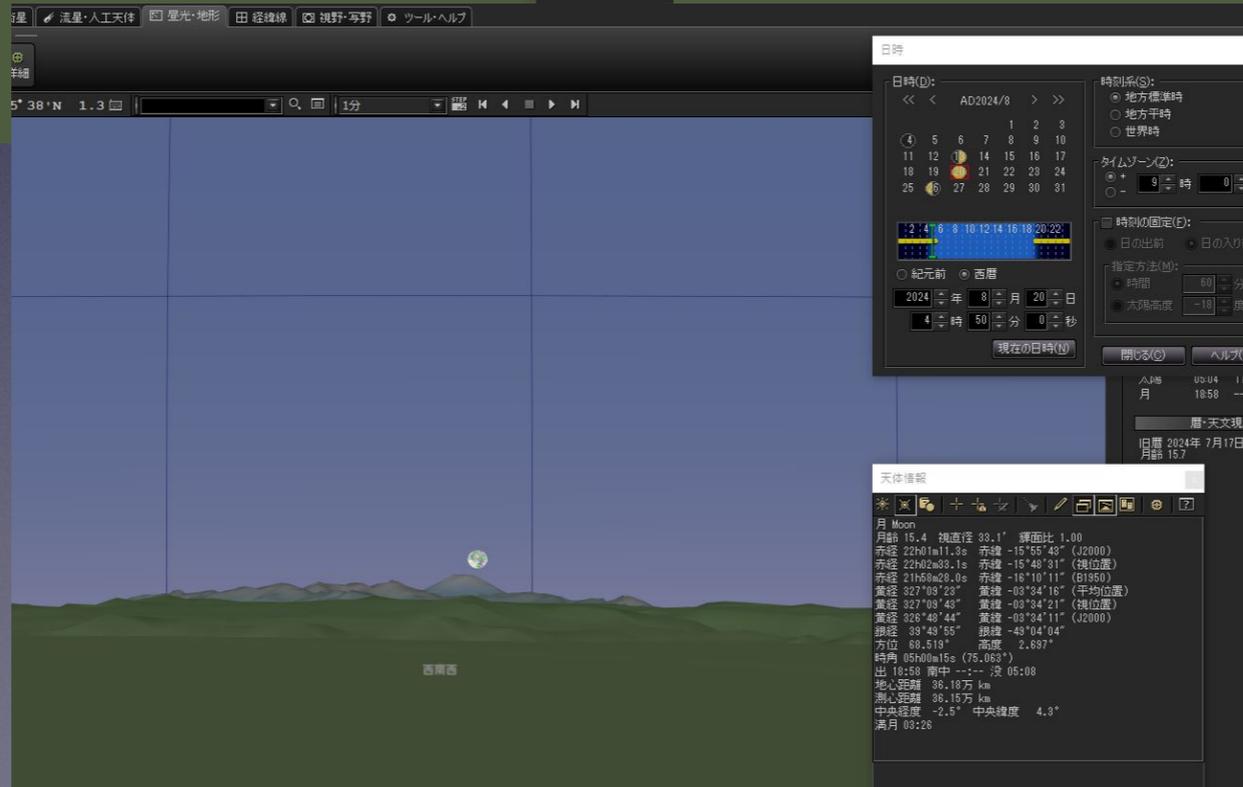
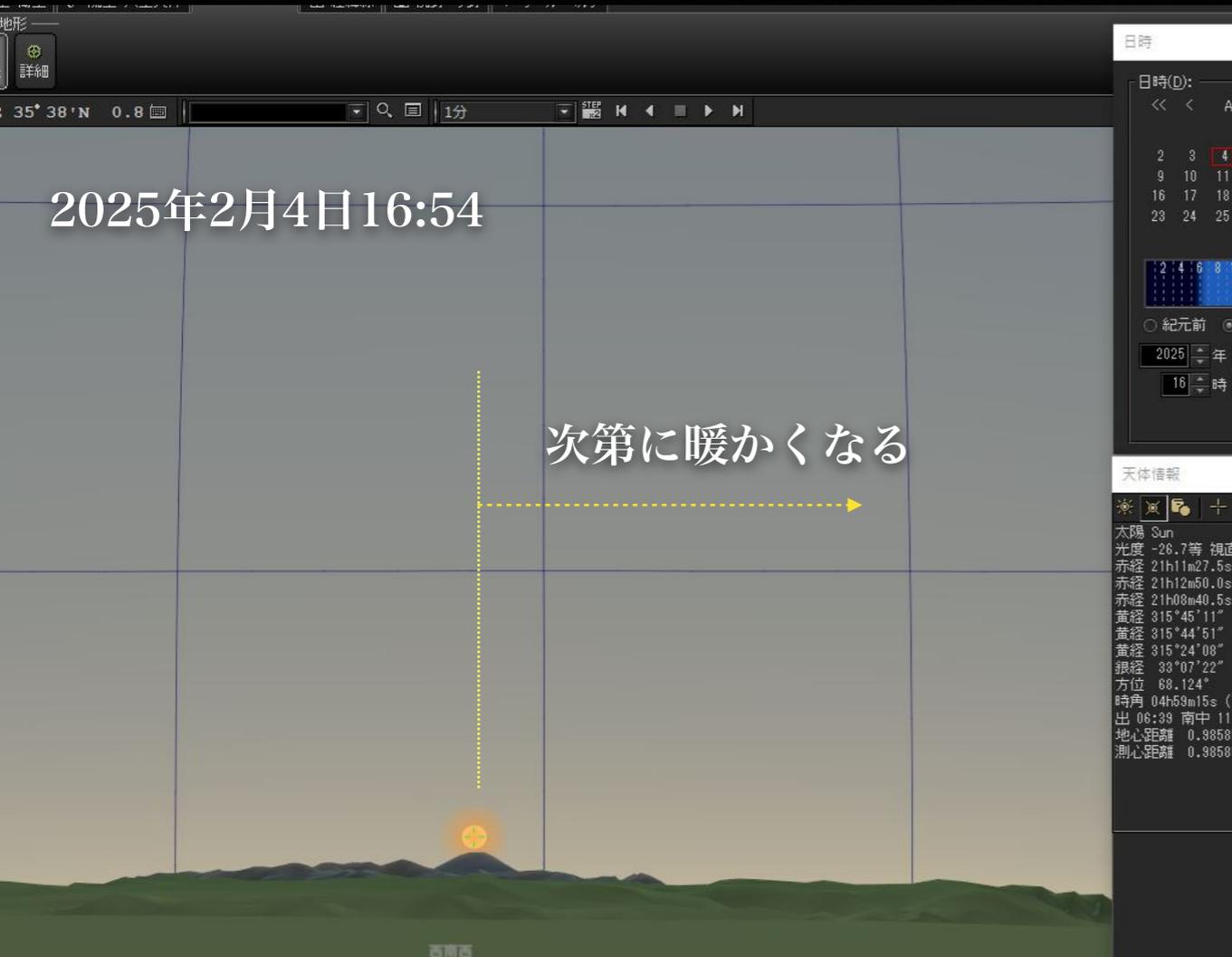
2025年2月4日16:54

次第に暖かくなる

2025年11月6日16:25

寒い季節がくる

満月が富士山に沈む情景  
も夏には訪れる

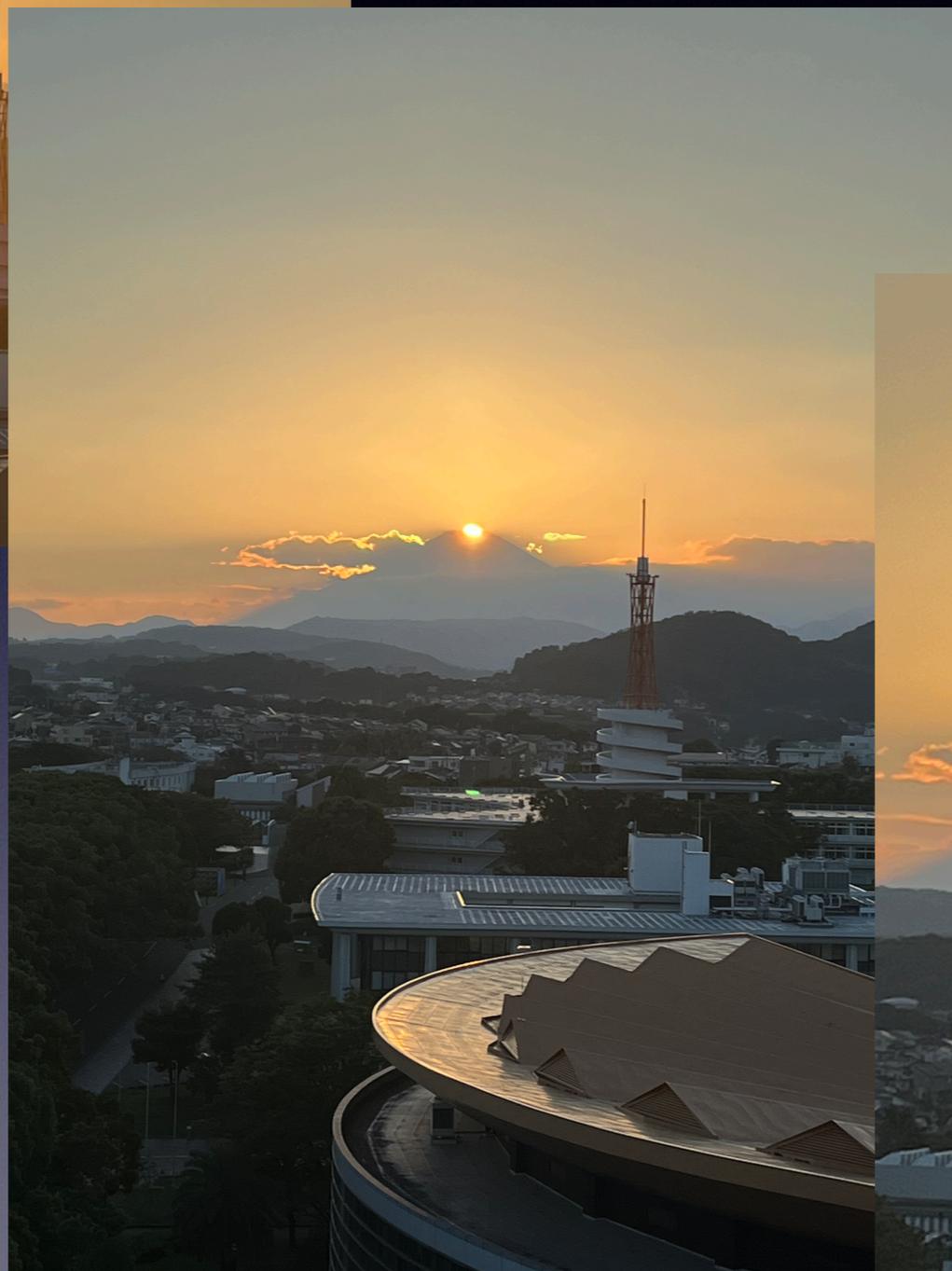
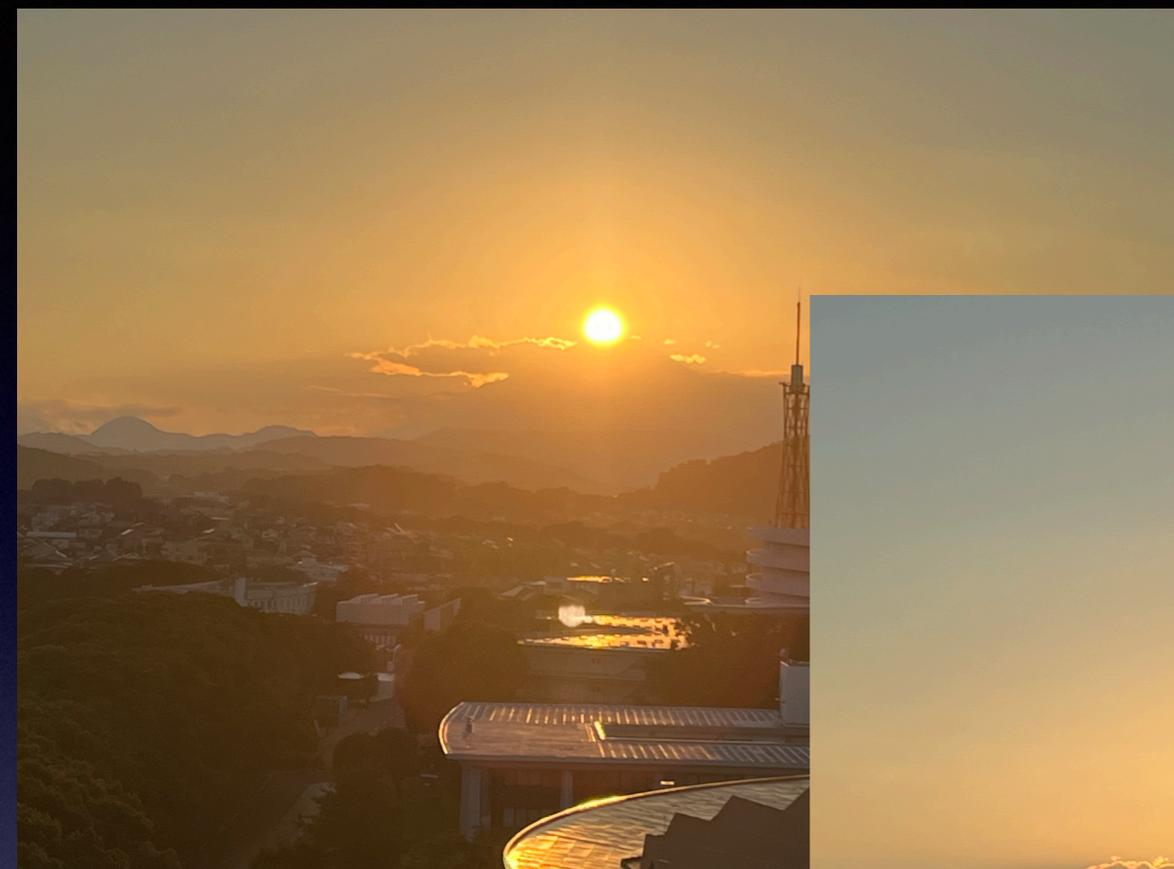


# 東海大学湘南校舎から観察されるダイヤモンド富士

東海大学湘南校舎からだて真西に富士山を仰ぐ  
春分の5日後と秋分の5日前

2024年9月17日17:23

2025年3月25日17:30



太陽が昇る直前に現れ日の出とともに消える星々（旦出）や、日没直後に太陽を追うかのように現れて消える星々（旦入）、日没直後に現れる星々（宵出）が季節変化の指標となった可能性

① 日没直後の北斗七星

② プレアデス星団（昴）・アルデバラン・オリオン座の三つ星・シリウスの4星（団）

北西

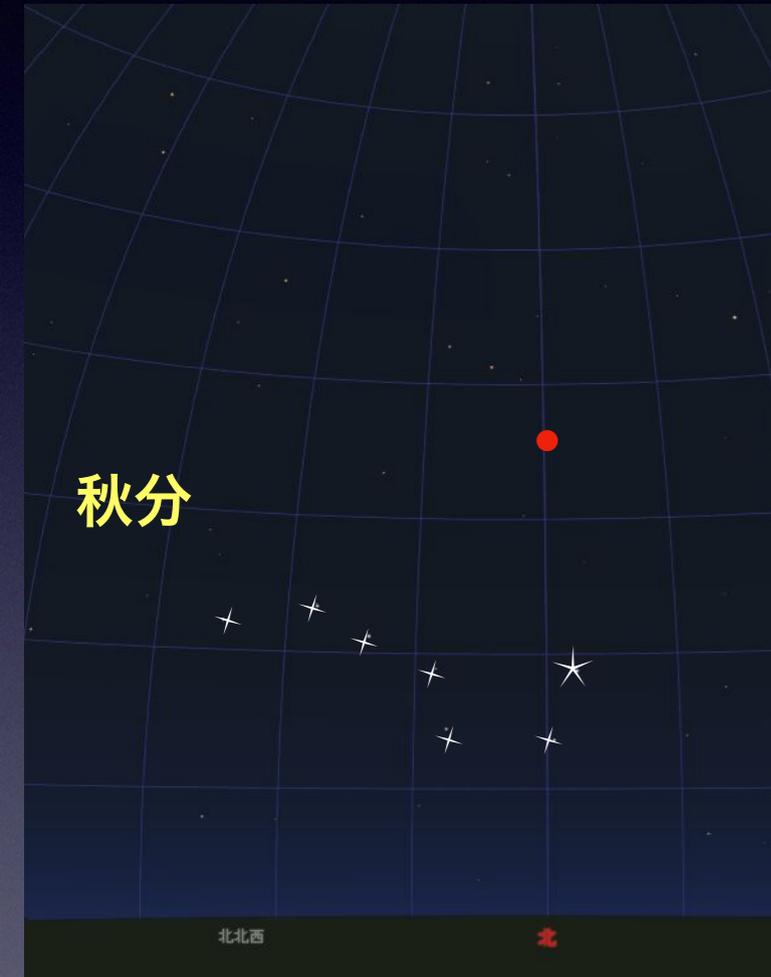
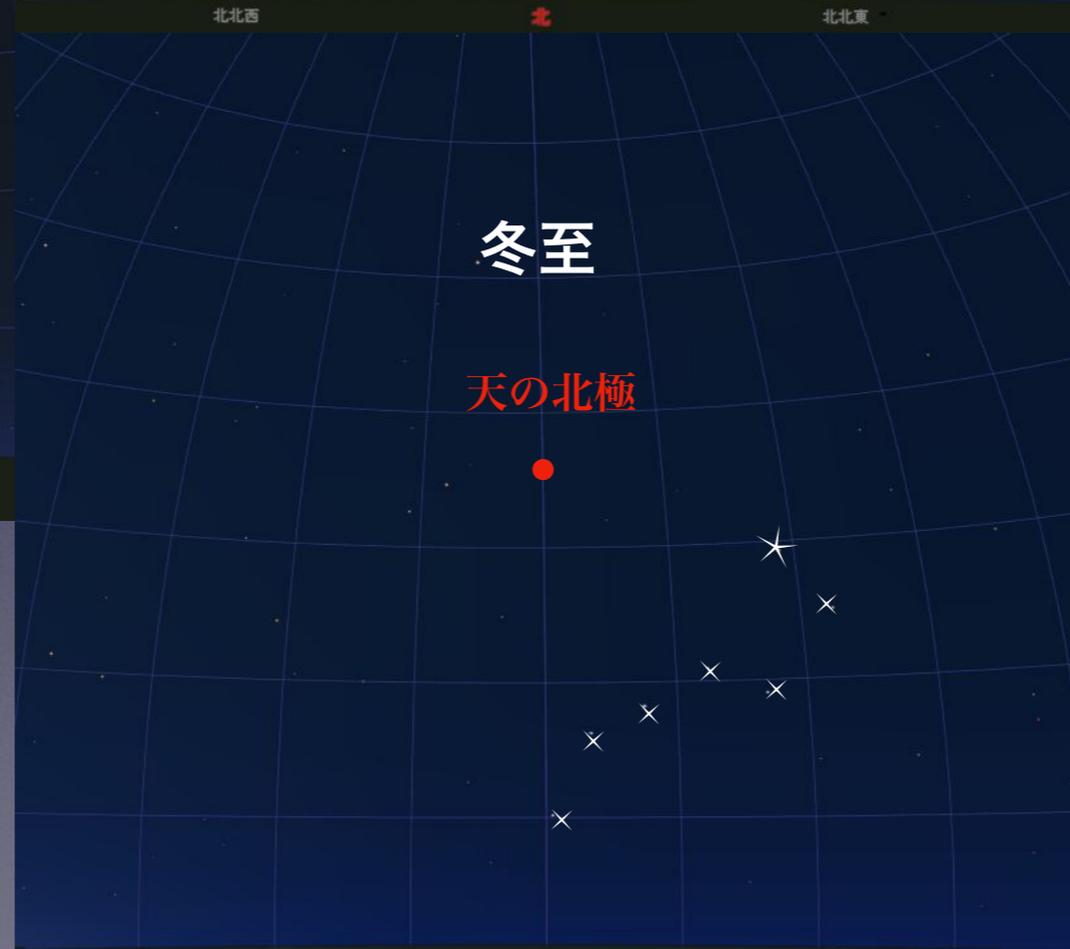
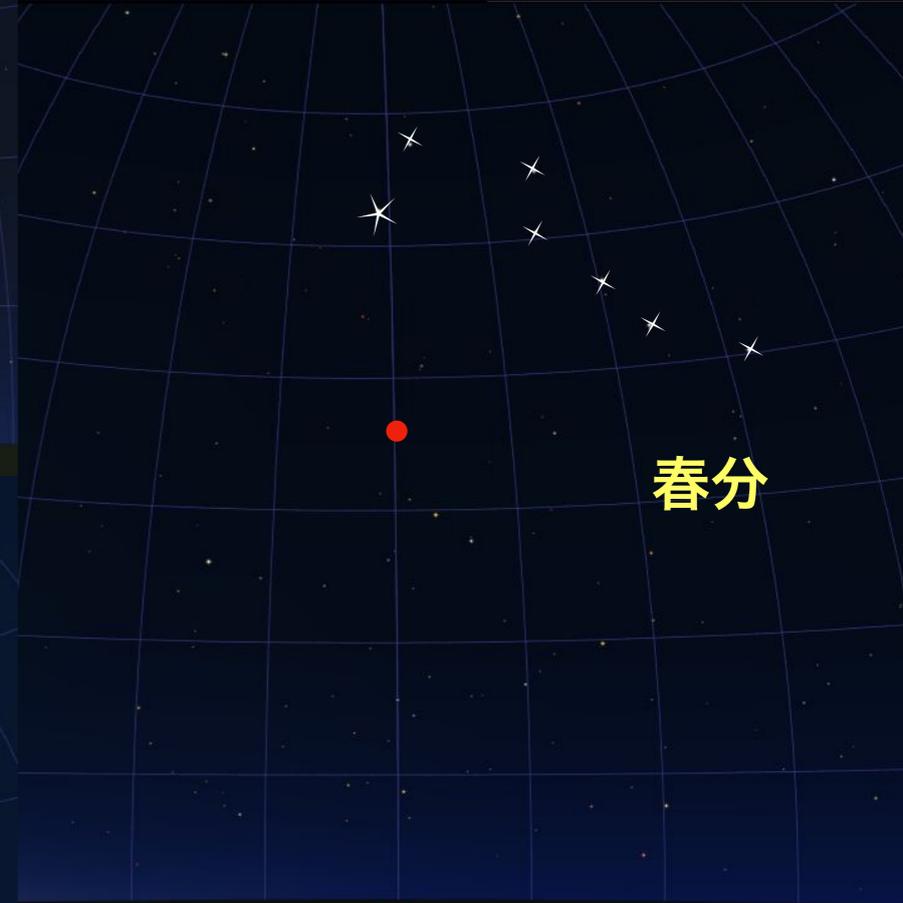
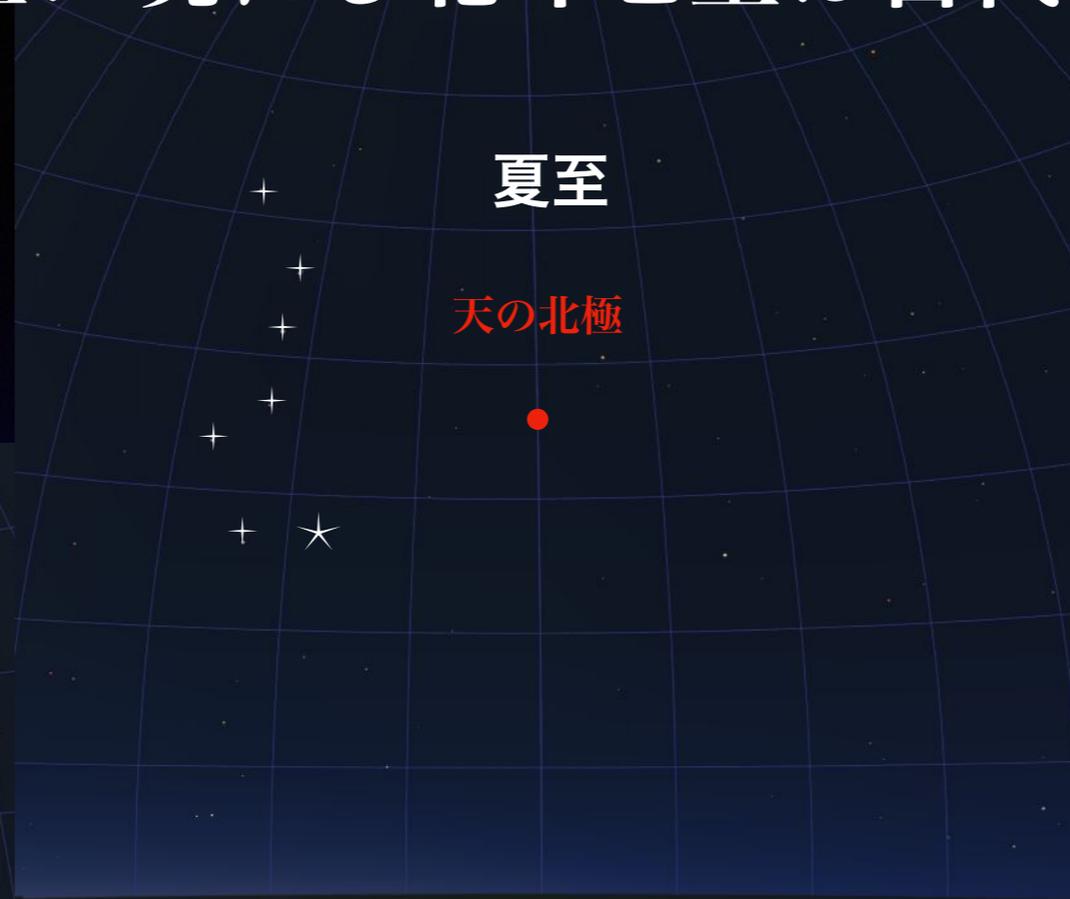
北北西

北

北北東

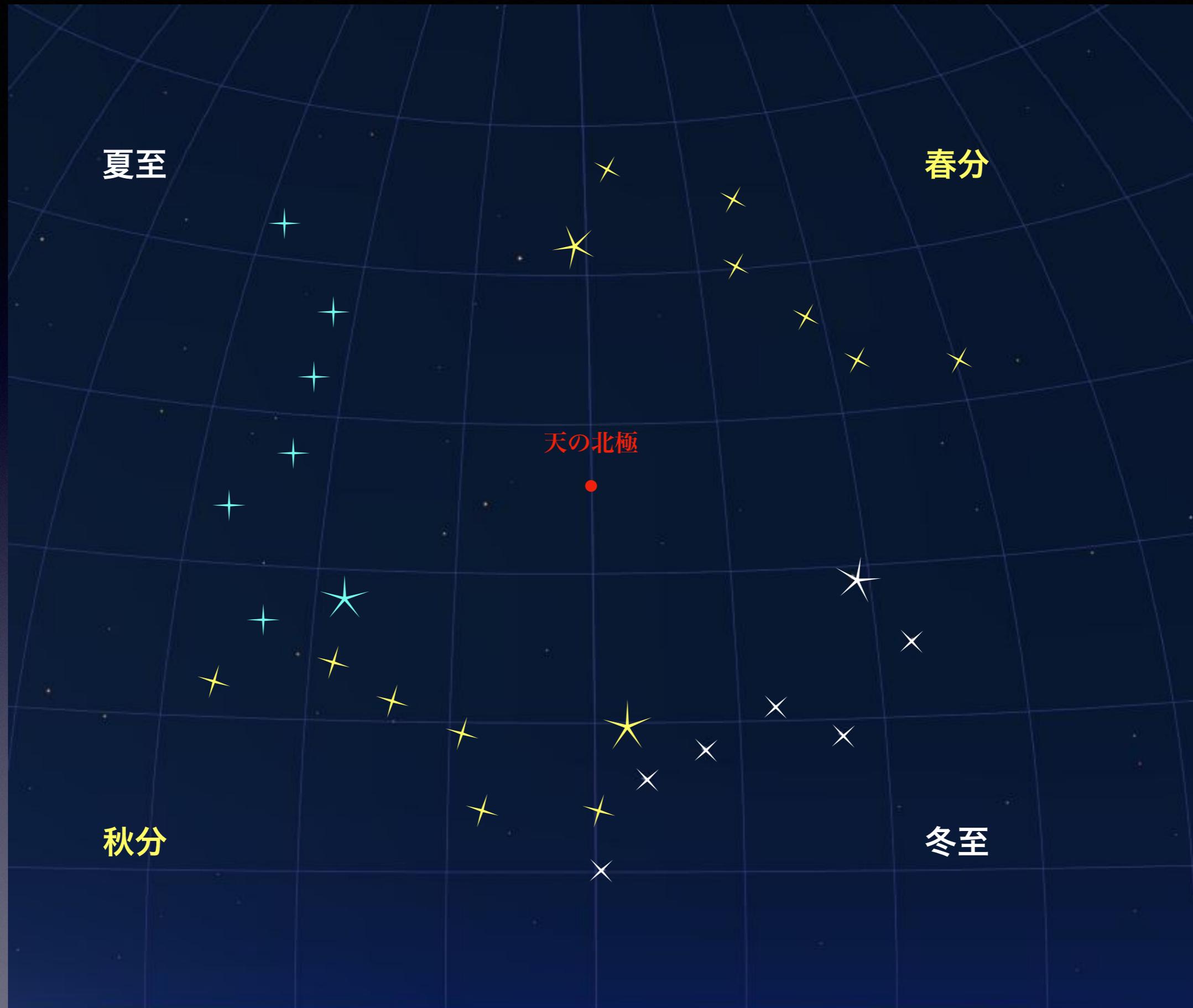
北東

# 日没直後の北の空に現れる北斗七星は古代中国でも重視された



縄文時代晩期の北の空には  
「北極星極」はなかった

縄文時代晩期（2,800年前）  
の北斗七星は現代より天の北  
極に近いところを廻る周極星  
であった



この情景が季節変化の指標として活用された可能性は高い

# プレアデスからシリウスまでの4星（団）は世界各地で重視された



プレアデス（昴）からシリウスまでの一連の星（星団・星座）は世界各地で暦の指標とされた。とくに漁業や航海とは深く関連づけられていた

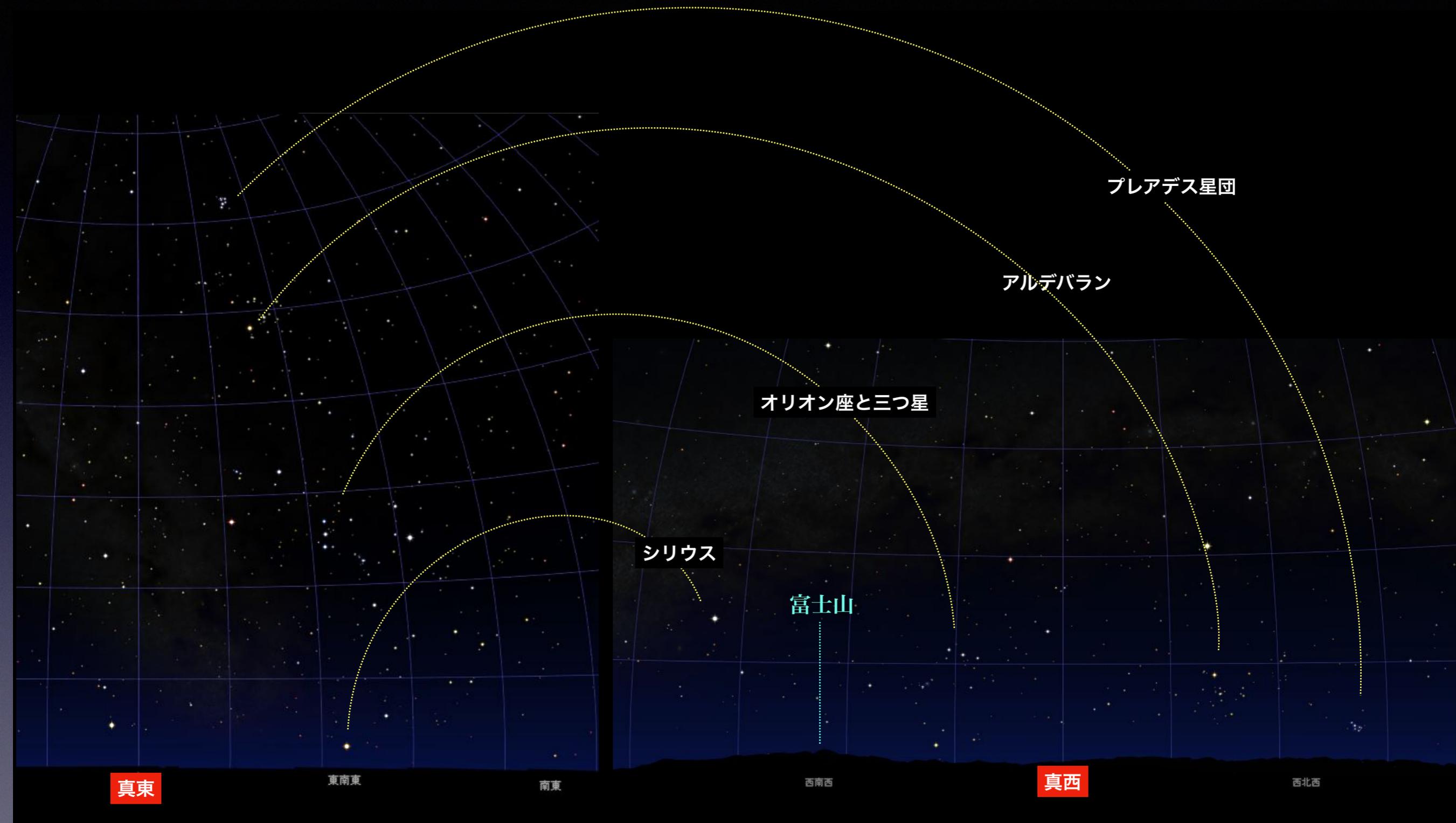
旦出（近太陽上昇）と旦入（近太陽没）

「宵出」（夕暮れの東の空に現れる星）

プレアデス（昴）からシリウスまでの一連の星（星団・星座）が、旦出や旦入、「宵出」に近いタイミングで観察される期日を特定し、生業との関わりを探る

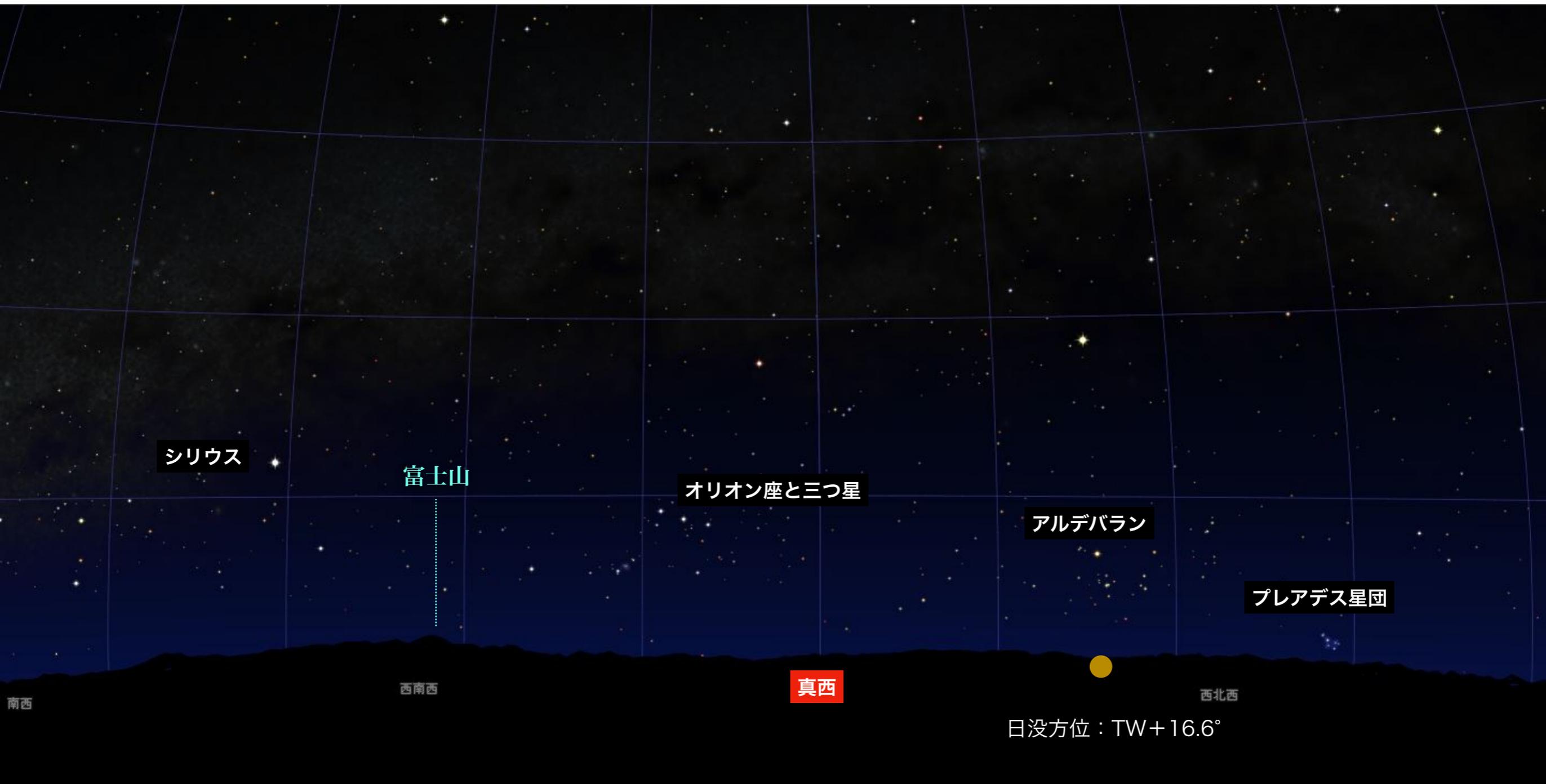
多摩川の幸をめぐる季節性との関係を重視

# 直立状態で出現し、没入時には平行となる4星（星団）



プレアデス（昴）からシリウスまでの一連の星（星団・星座）が、旦出や旦入、「宵出」に近いタイミングで観察される期日を特定し、生業との関わりを探る

# 下布田遺跡からみた2025年4月28日19:25の4星（団）



日没は18:14

プレアデス星団：20:11 没

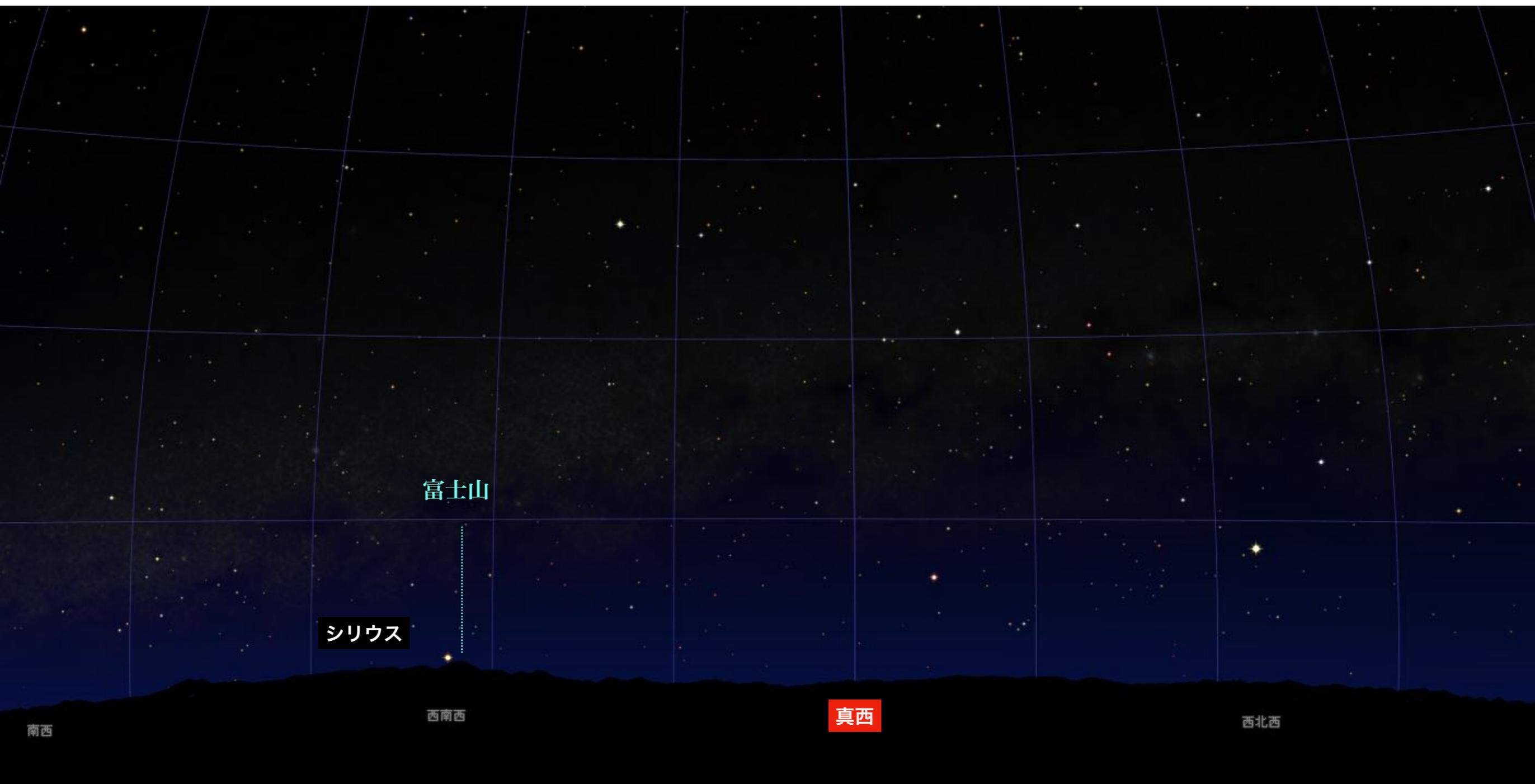
アルデバラン：20:34 没

三つ星：20:45 没

シリウス：20:59 没

日没方向に輝く4星（団）なので旦入に近い情景として印象深い

# 下布田遺跡からみた2025年4月28日のシリウスは富士山頂の南に没する



シリウス：20:59 没

# 下布田遺跡からみた紀元前900年春のシリウスと富士山頂



シリウス：20:04 没

多摩川の幸をめぐる季節性との関係を重視

# 下布田遺跡からみた2025年5月7日の日没



富士山

西南西

真西

西北西

日没は18:14 (TW+19.4°)

プレアデス星団は見えない

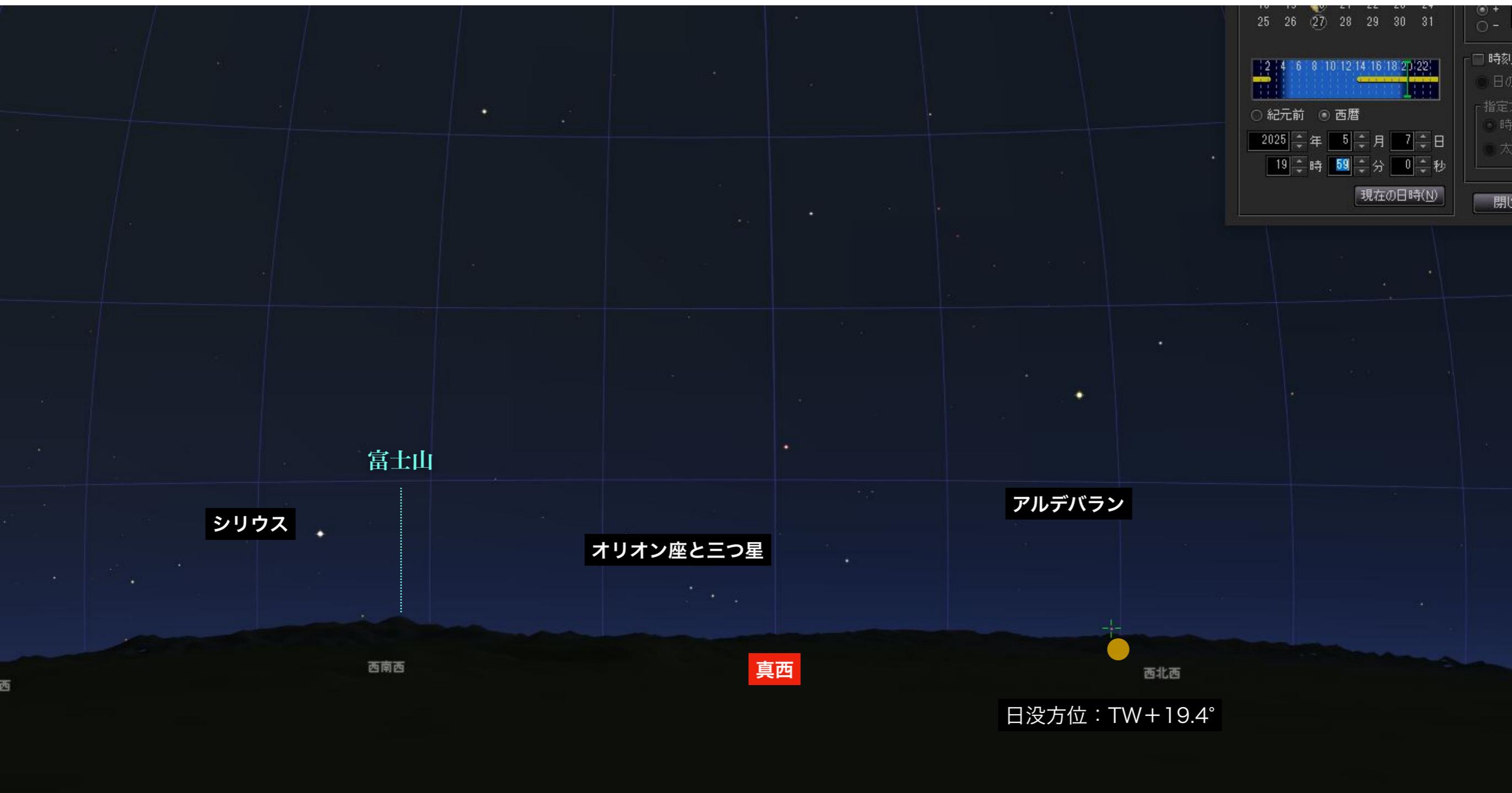
三つ星：20:09 没

アルデバラン：19:27頃に視認され19:59 没

シリウス：20:24 没

日没の地点とアルデバランが没入する地点が一致

# 下布田遺跡からみた2025年5月7日19:25の4星（団）



プレアデス星団は見えない

三つ星: 20:09 没

アルデバラン: 19:27頃に視認され19:59 没

シリウス: 20:24 没

日没の地点とアルデバランが没入する地点が一致

## 多摩川中流域の流路屈折部



## 多摩川の幸をめぐる季節性との関係

**ウグイ（ハヤ）の産卵期：4月下旬～7月**

砂礫底の瀬を好んで産卵。人工の産卵場所を造り集まったウグイを捕獲。長野県千曲川では4月下旬から6月まで「つけば」漁が盛ん。

**フナの産卵期：4月～7月**

浅瀬の水草が繁茂している場所や、増水した水域で産卵。浅瀬に集まり水草などに卵を産む。

**アユの遡上期：4月下旬～6月**

**オイカワの産卵期：5月下旬～8月下旬**

**ナマズの産卵期：5月下旬～7月初旬**

プレアデス-シリウス4星（団）の旦入と関連づけて認知された可能性が指摘できるのではないかと

銀河（天の河）が南北を横断する情景



ウグイの産卵

Underwater Photography ©oryza\_atherina

# 下布田遺跡から見た2025年10月1日19:41の情景



日没は17:11

プレアデス星団：19:40頃から視認可能

アルデバラン：20:49 出

三つ星：22:47 出

シリウス：0:36 出

日没後まもなくプレアデス星団が出現し、アルデバラン以下が順次出現する「宵出」

## 多摩川中流域の流路屈折部



# 多摩川の幸をめぐる季節性との関係

## アユの産卵期：10月～12月

産卵は河川下流域の瀬でおこなう。礫間に産卵するためアユが動かせる程度の礫が必要。産卵中のメスの後方にたくさんのアユが集まることが多い。食卵のため。下流の産卵場にたどり着いたアユは大きな集団となり、やがて産卵が始まる。

## ウナギの旬：10月～12月

天然ウナギの旬は10月～12月で、この時期のウナギは脂がのって美味しく食べられる。

## サケ科の魚の遡上



アユの産卵



プレアデス-シリウス4星(団)の「宵出」と関連づけて認知された可能性が指摘できるのではないか

縄文時代晩期の下布田遺跡からは冬の南十字星が高度 $10^{\circ}$ 以上の高さで見えた。地球の歳差運動の影響。

地形  
表示 詳細

33°E 35°38'N 6.7

1分

日時

日時(D): BC801/12  
時刻系(S): 地方標準時  
タイムゾーン(Z): 9時 0分  
時刻の固定(E): 日の出前 日の入り後  
指定方法(M): 時間 60分後 太陽高度 -18度

南十字星

南南東 南 南南西

暦・天文現象  
旧暦 紀元前801年11月 1日  
月齢 0.1  
■ 04時37分 新月  
■ 02時19分 月が火星の南0.7° 通過  
■ 16時14分 月が最南

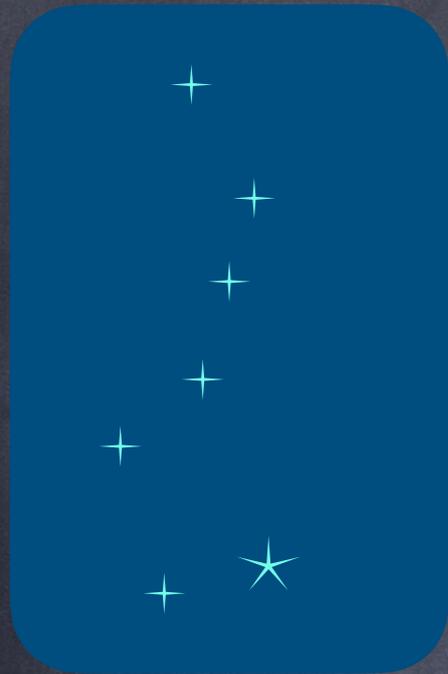
方形配石遺構の方位と関係する可能性も視野に入れたい

プレアデス星団-シリウスまでの出没範囲も変化するが、季節の移り変わりは同じ

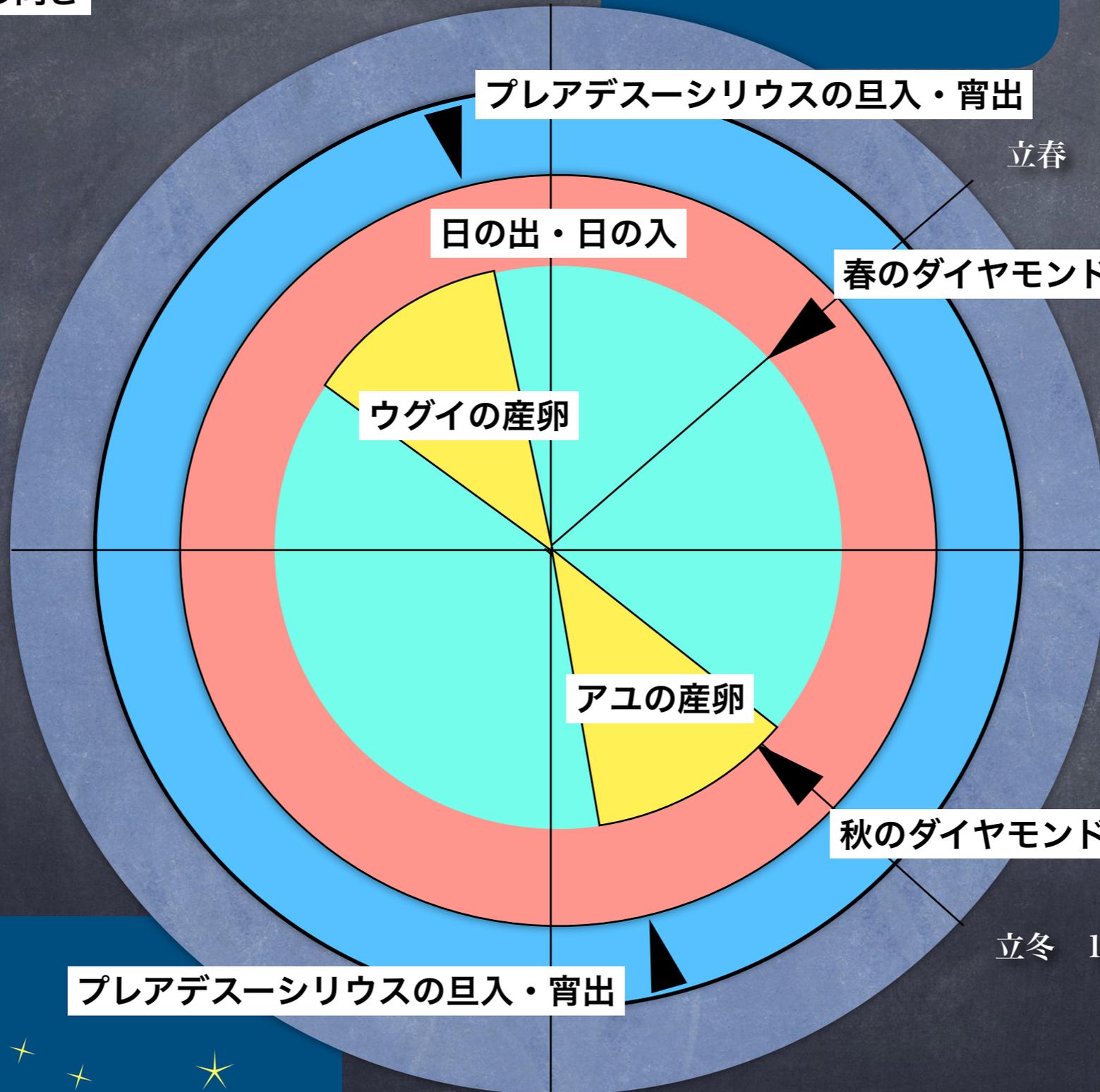
# 下布田遺跡の縄文自然暦

春分 3/23  
太陽黄経0°

日没直後の北斗七星の向き



夏至 6/23  
太陽黄経90°



立春 2/4 前後



冬至 12/22  
太陽黄経270°

立冬 11/7 前後



太陽黄経180°

秋分 9/22



## 蛇足

長野県育ちの私は子供の頃に臭いのあるウグイの煮付けを食べさせられた経験から、ウグイは不味い川魚だと決めつけてきました。

ところが大人になって千曲川の「つけば」小屋で捕れたたてのウグイの塩焼きを食べたとき、その美味さに驚かされました。臭みも全くないのです。以来、ウグイは「猫またぎ」などではなくご馳走なんだと実感しています。縄文晩期の多摩川の清流から捕れたウグイも美味かったに違いありません。



ウグイの後に産卵するオイカワ

# 縄文自然暦の特徴

各種の狩猟・漁労・採集を担う個人が、それぞれに組み立てた最適なタイミング（好機）の指標

周辺景観のどの要素同士を関連づけるかは自由で、個人個人の経験知に沿って組み立てられた可能性が高い

個別の生業にとってはきわめて実用的な暦

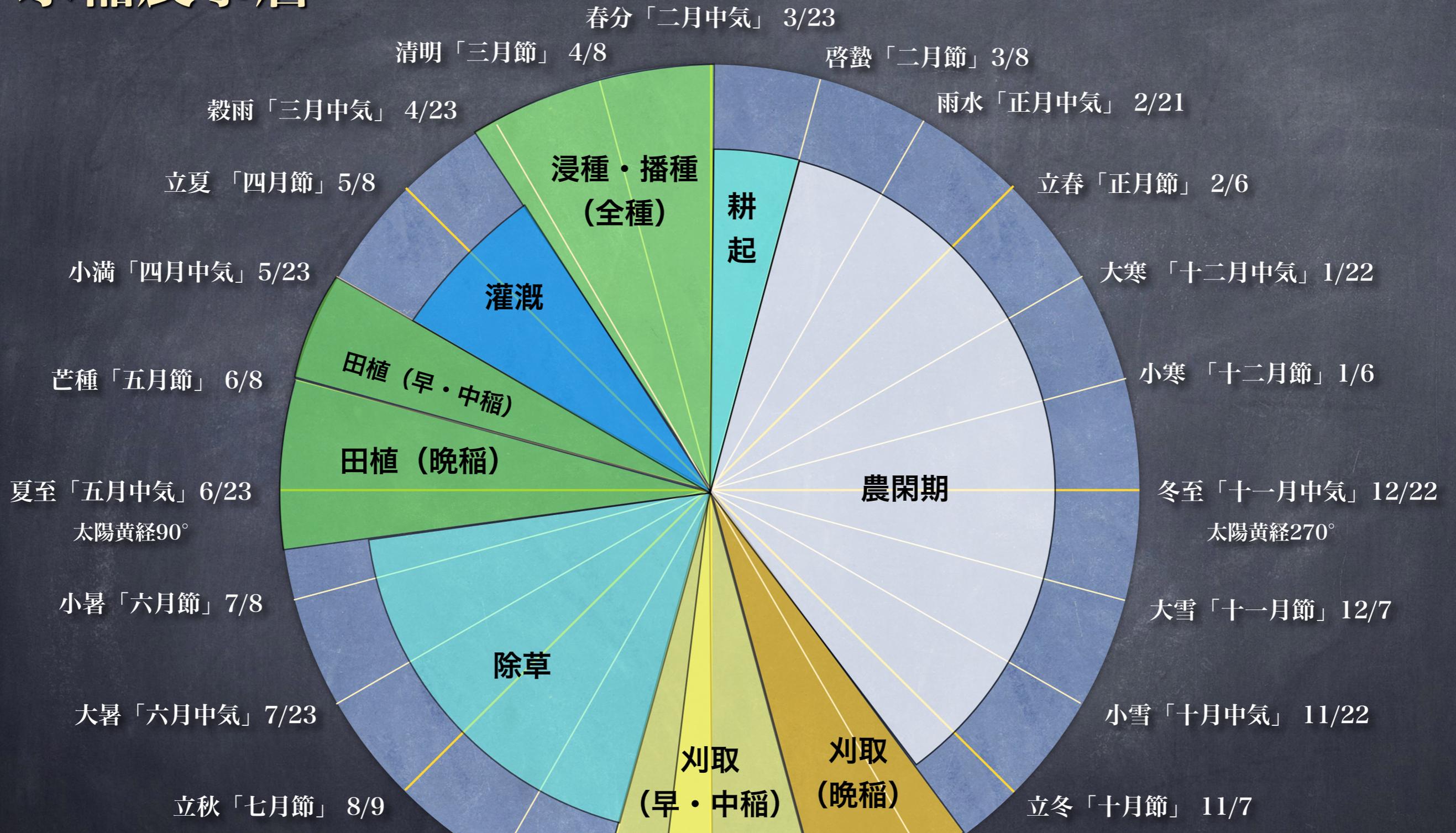
総合すれば①～⑦までが階層化された関係となり、単一の指標ではないため、複雑きわまりない暦の束となる

多角的狩猟採集経済社会を根底から支えた暦

# 水稲農事暦

太陽黄経0°

## 二十四節気と太陽黄経「平気法」



水稲農耕民は集約的な労働を強制されるので、農繁期に星空を見上げる余裕はない。ダイヤモンド富士は農閑期なので観察できたが、生業とは無縁。なお冬至の朝日は祭礼との関わりで拝まれた可能性がある。

# 6. まとめ

## 縄文自然暦にたいする私の理解

### 旧石器・縄文時代の社会

この時代の人々は我々以上に自然界の現象に敏感であった  
自然現象全体への総合知を備えていた可能性

他者に指図されることなく皆が自然暦を利用した可能性

### 弥生時代以降の社会

暦は支配者や知識階層者に独占された

民衆は首長層の指示に従うことが至上命題

縄文自然暦は形骸化して地域社会に一部が残存

考古天文学は英国ストーンヘンジを舞台に形成され、年代測定の試みから始まり、年間の節目としての夏至と冬至に合わせた景観設計であったと評価され今日に至る

ご静聴に感謝します



ジェラルドホーキンスの”STONE HENJE DECODED”が発表されたのは1963年  
クライブラグレスの再整理によって、考古天文学的な評価が定まったのは1997年

# 天の石窟伝承と冬至祭



弥生時代の唐古・鍵遺跡で開催された冬至祭が記紀に記された天窟伝承の原型であり、それは赤色野鶏が冬至の朝日を誘い、勾玉が捧げられる祭祀であった可能性は高い



鎮魂祭において「宇気槽の儀」を執り行う役目が女官であったことは、太陽神が本来は男神であったことを物語る

# 黄道傾斜角の変動と日の出・日の入り方位の関係

(黄道傾斜角は9,000年前から着実に減少中)

北緯51度10分44秒 (英国ストーンヘンジ)

紀元前2,620年夏至の日の出方位 (0.94°北から)

紀元前2,621年冬至の日の出方位 (0.92°南から)



4,500年間の変動幅 (0.943°)

100年間に0.02°の変化 → 年代測定に応用可能

1901年、ノーマン・ロッキヤーがペトリ—の図を利用し、黄道傾斜角の変化を推計。遺跡の造営年代を紀元前1600年と推定 → **黄道傾斜角の変化から年代推定を実施**

1963年、ジェラルド・ホーキンスが立石の配列を太陽の運行と月の運行との関係で計測。

1994年、ロス・クリールによる天体現象との関係の再整理 → **天文考古学の開始**

黄色は満月・白は新月

春分 3/23=二月十七日

二十四節気と太陽黄経

「平気法」

清明 4/8=三月三日

啓蟄 3/8=二月二日

雨水 2/21=一月十六日 (祈年祭)

穀雨 4/23=三月一八日

立夏 5/8=四月四日

立春 2/6=正月元旦

小満 5/23=四月一九日

大寒 1/22=十二月二七日

芒種 6/8=五月五日

小寒 1/6=十二月一日

夏至 6/23=五月二十日

冬至 12/22=十一月二六日

小暑 7/8=六月六日

大雪 12/7=十一月一日

大暑 7/23=六月二一日

小雪 11/22=十月二六日

立秋 8/9=七月七日

立冬 11/7=十月一日

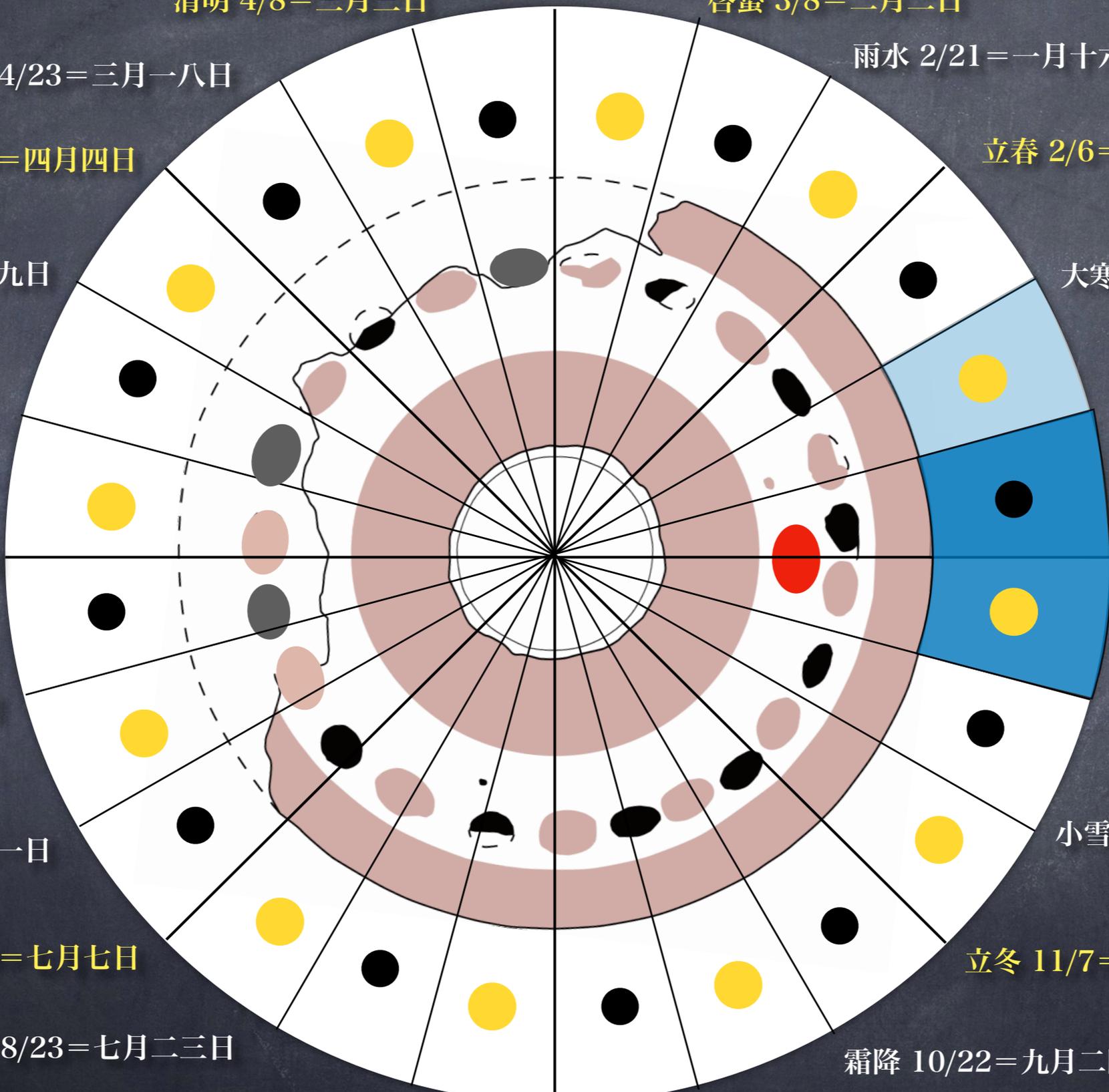
処暑 8/23=七月二三日

霜降 10/22=九月二四日 (神嘗祭)

白露 9/7=八月八日

寒露 10/7=九月九日

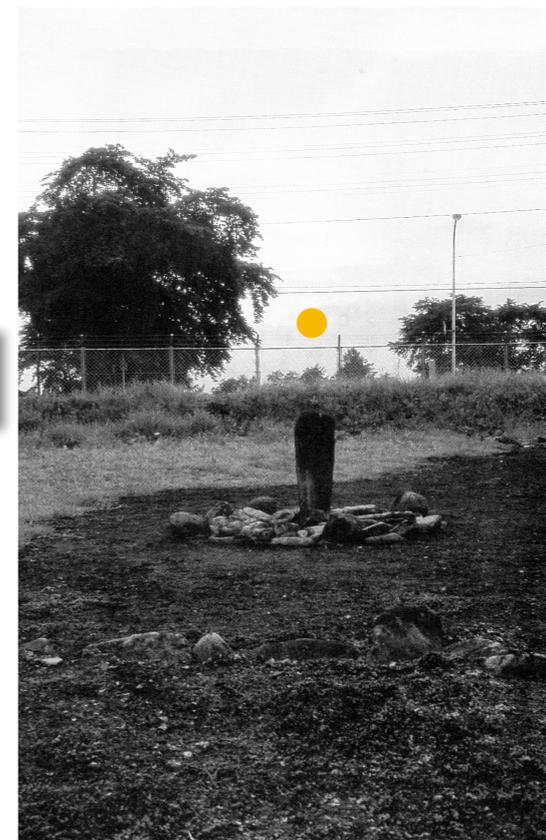
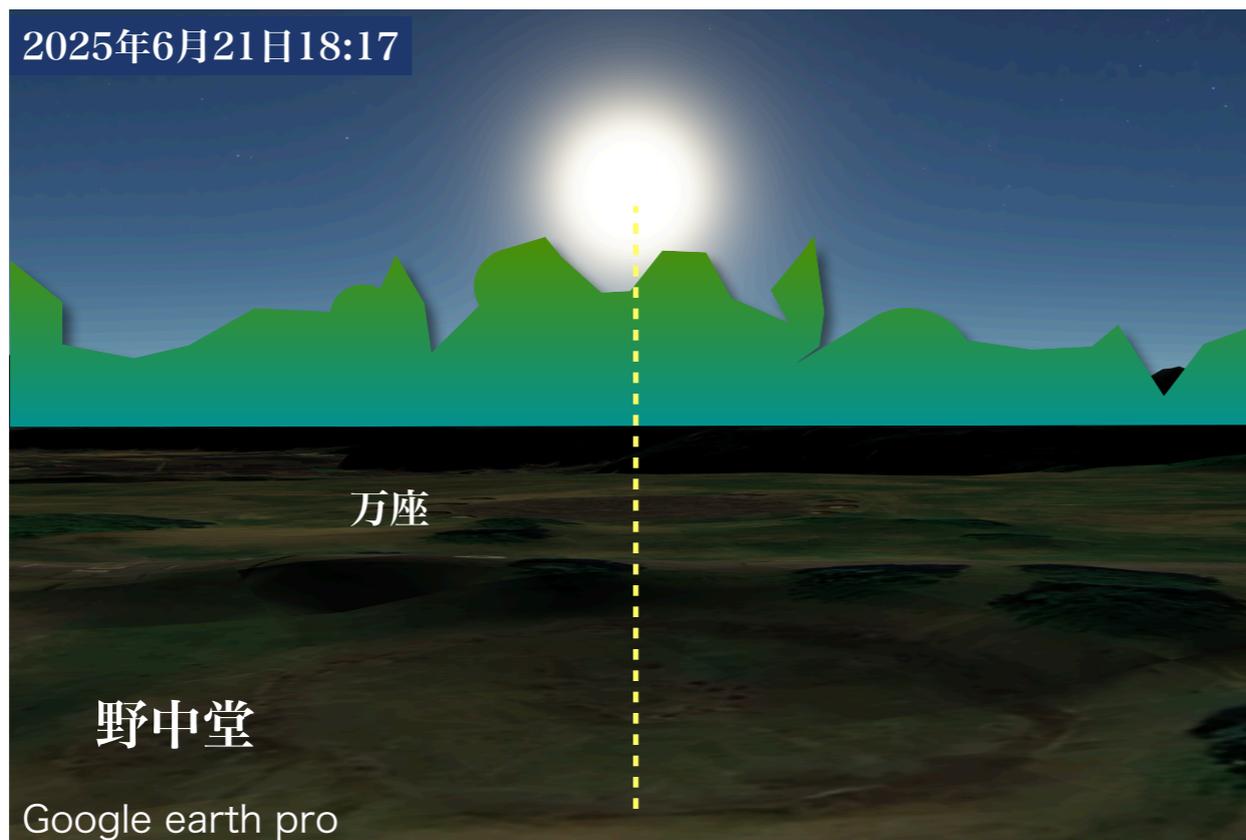
秋分 9/22=八月二三日



# 小林達雄 「縄文ランドスケープ」 論の問題

日没前の沈みゆく夏至の日の入りが軸線上に重なる情景を重視した

「日本のように森林が密に生い茂る地域にあっては—中略—樹木に隠されて遠くのスカイラインまで見通せなくて、実際に太陽が沈むのが観察されるのは天文学的な日没よりもある程度太陽高度が高い状態においてであろう」（小倉勝男 2005,25頁） ... 小倉勝男氏は天文学者でこのとき国学院大学教授

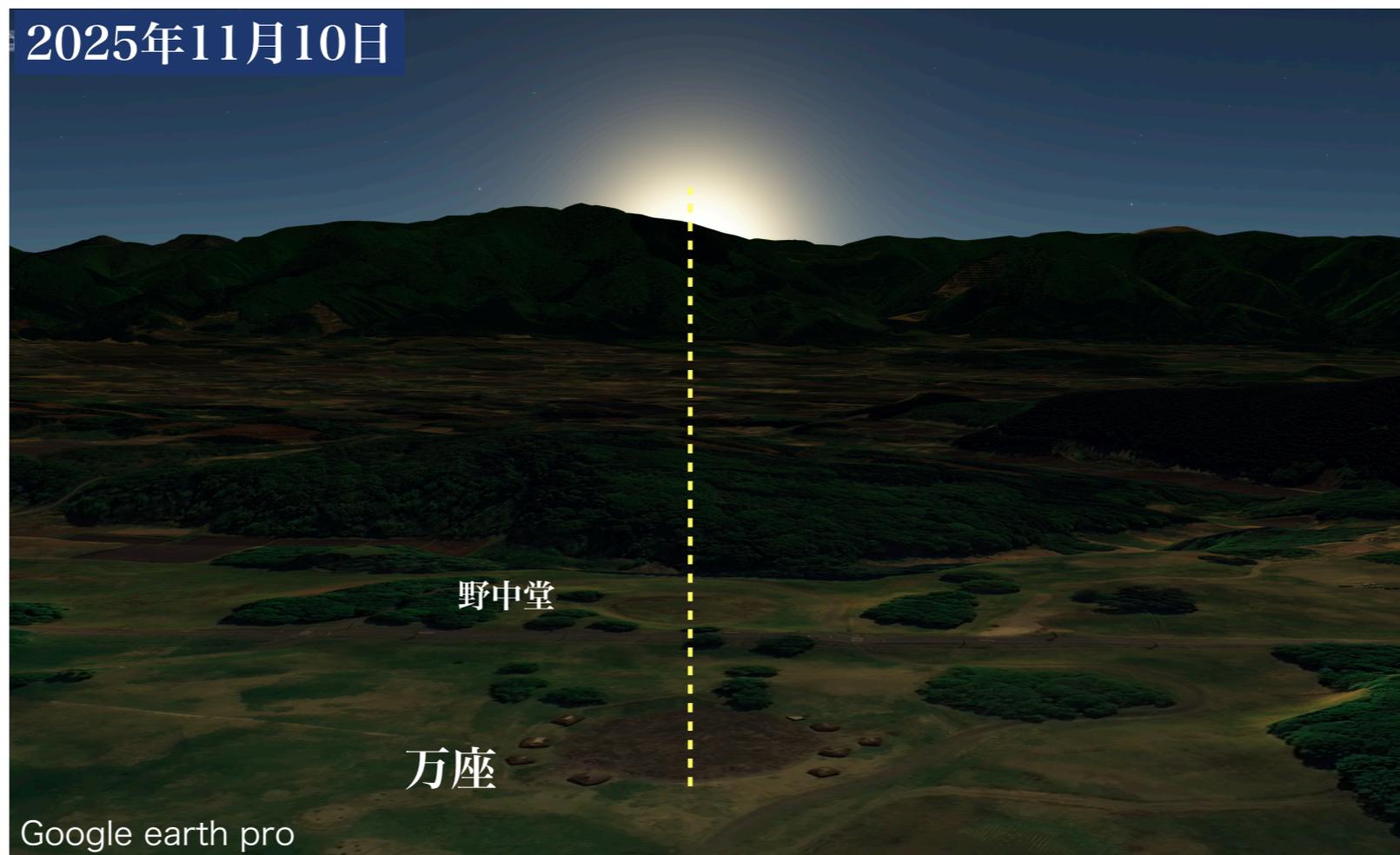


類似した情景は5月下旬から7月下旬までの2ヶ月間にわたる全夕刻時に現れるので、立石と観測者の立ち位置や姿勢など、視認されるべき高度が特定される必要がある。しかも対になる上記期間中の2日の組み合わせが導かれる

# 小林達雄「縄文ランドスケープ」論の問題

「私は実は、万座・野中堂の両環状列石とも中心に大きな柱が立てられ、夏至ではなく冬至の日の出直後の太陽によるその影が日時計状組石に落ちるように作られていたのではないかとの推測をしている」

(小倉2005,25頁)



11月上旬と2月上旬の両日の早朝の影を想定した方が蓋然性は高い

天文学者である小倉氏が、なぜ上記のような荒い議論をしたのか不審さが拭えない

# 小林達雄「縄文ランドスケープ」論の問題

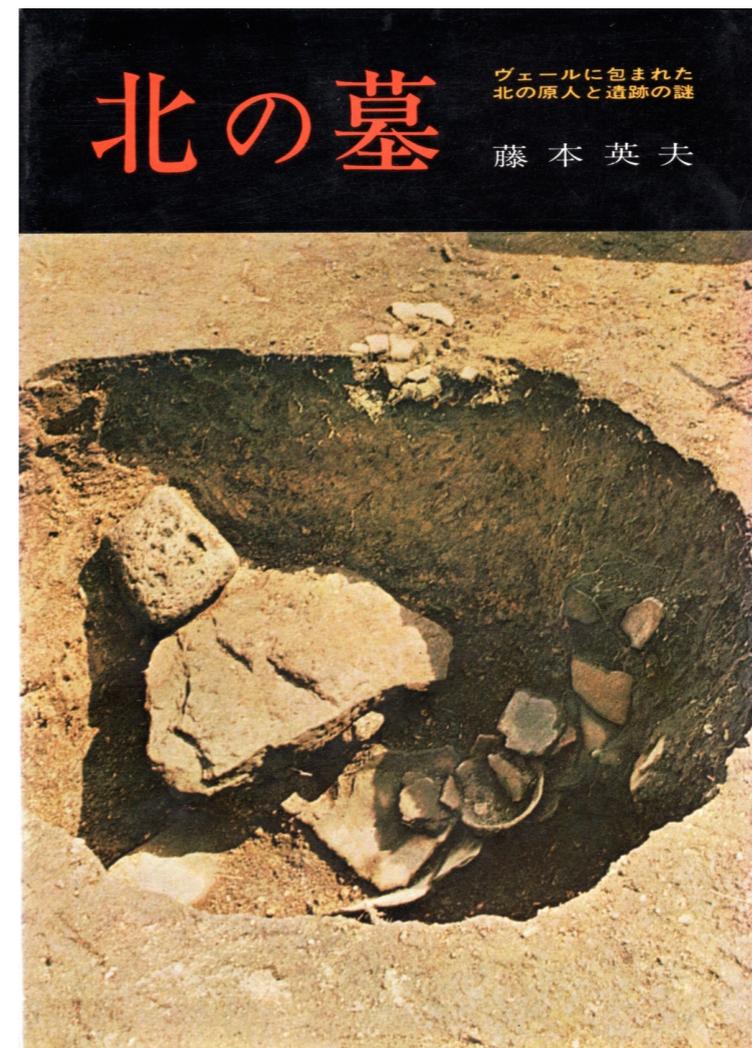
日本考古学における重要な先行研究の無視

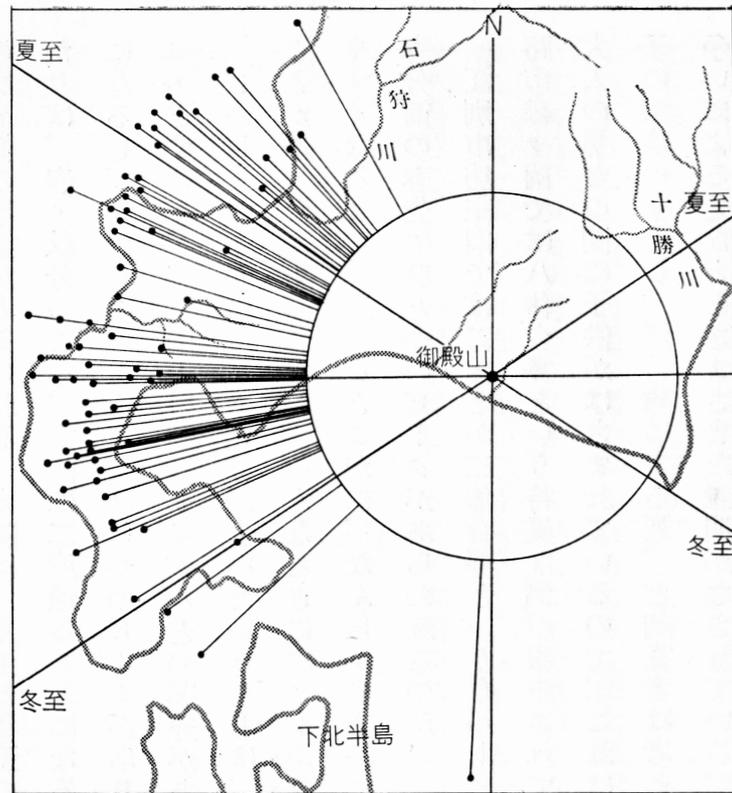
\* 専門的研究者の場合は許容されない行為

藤本英夫1971『北の墓-ヴェールに包まれた北の原人と遺跡の謎-』学生社

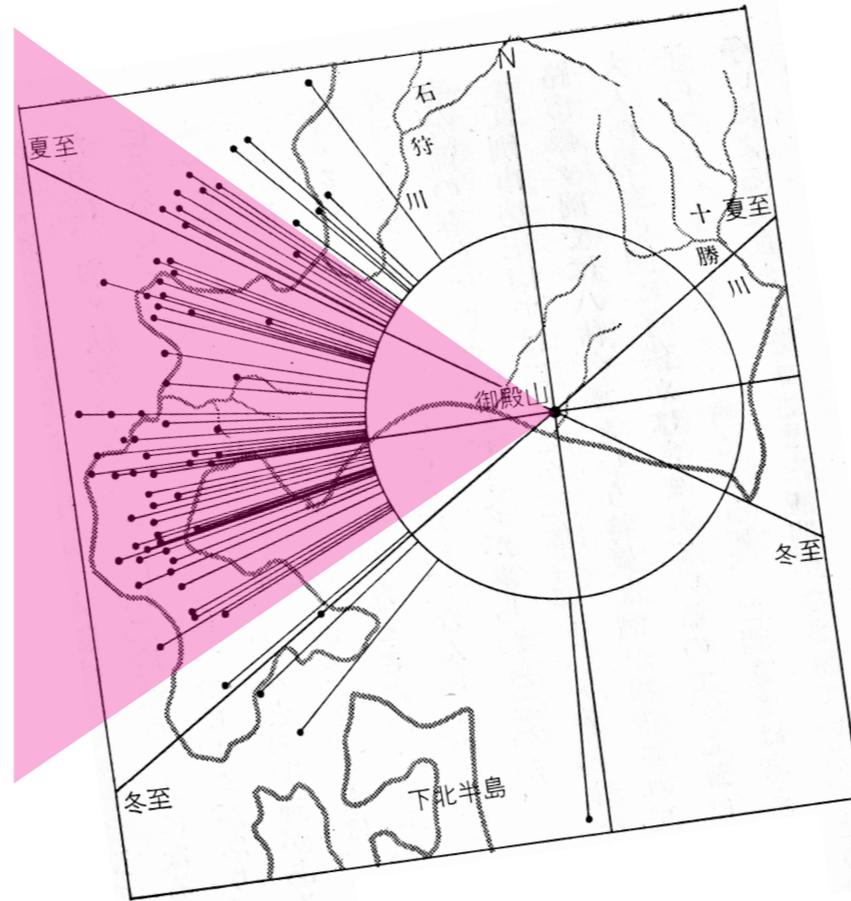
北海道の御殿山遺跡（縄文時代後期・晩期の集団墓地）を調査し、埋葬頭位が年間の太陽の没する範囲に収まることを解明。縄文人は夏至と冬至の日没方位を熟知していたとの理解。

縄文時代の遺跡を対象とした考古天文学的な考察として先駆的な業績。



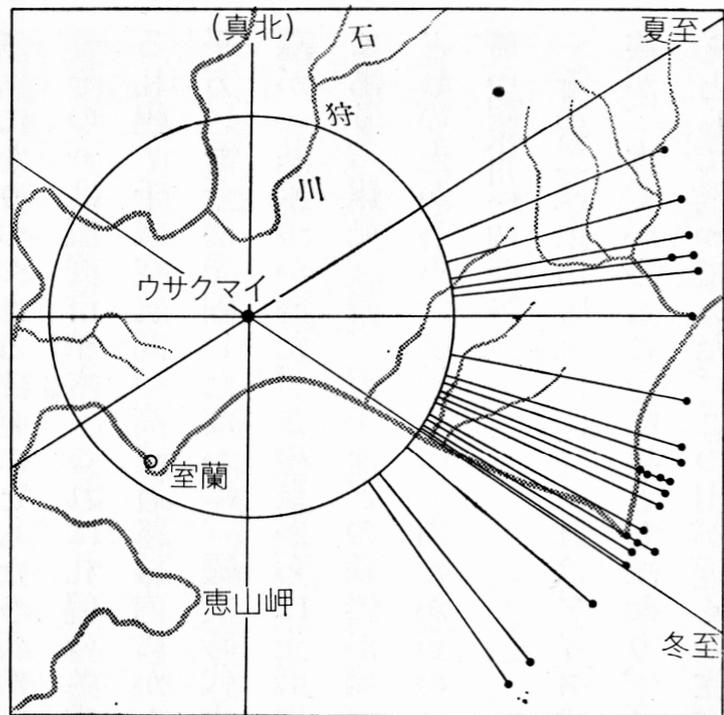


御殿山墳墓群の頭位方向  
74例(北緯42°19')。

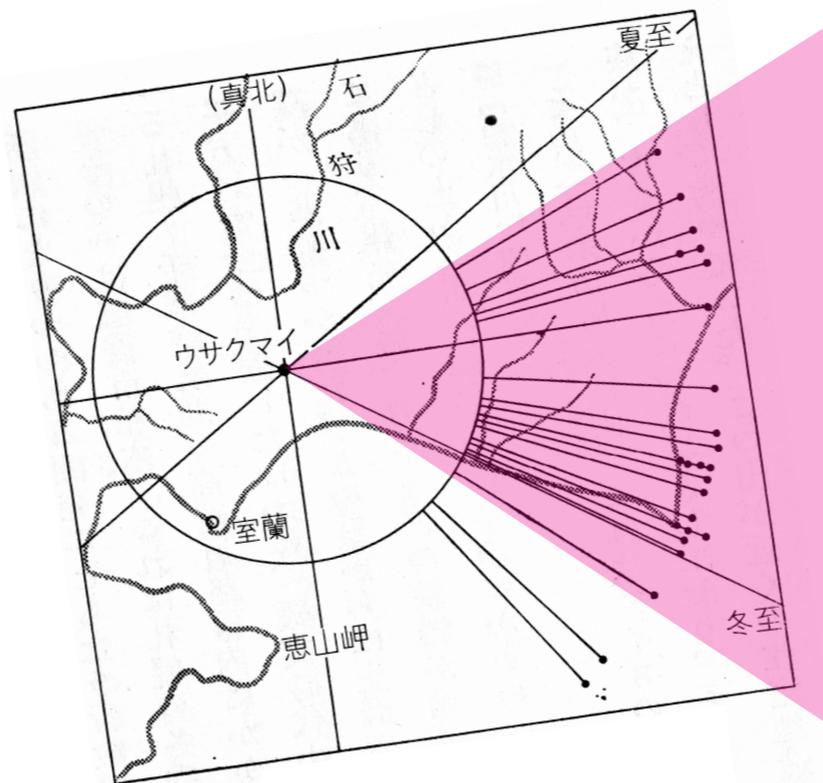


静内御殿山遺跡の埋葬頭位

(藤本 1971 文献：157 頁掲載図を補正)



ウサクマイ 墳墓群の頭位方向  
25例(北緯42°50')。



ウサクマイ A 遺跡の埋葬頭位

(藤本 1971 文献：182 頁掲載図を補正)

藤本氏の原図（左）は磁北を基準としたものなので、正確には真北基準に直し、黄道傾斜角の変動を考慮して補正する必要がある。現地の周辺景観を考慮して補正を施した図が右の2点。

藤本氏は縄文人が年間の太陽が没する範囲内に埋葬頭位を揃えたことを実証し、擦文時代人は逆に年間の太陽の出の範囲に埋葬頭位を揃え、それがアイヌ民族の埋葬習俗に引き継がれたことを論じた。

考古天文学的な考察としても先駆的な業績であるが、北海道大学の林謙作氏の痛烈な批判を受けたために、その後日本考古学界で重視されることはなかった

## 日本の自然暦と環境観

なまきひろちか  
講師：中牧弘允さん

吹田市立博物館館長 国立民族学博物館名誉教授



天体絵柄のネクタイを身につけられた中牧館長は、先に案内したテーマ「日本の歴史観と環境観」を「日本の自然暦と環境観」に変えて、より具体的に探っていきます、と始めました。

### ◆生活暦としての自然暦、ビジネスにも活かす

日本各地には季節によって、生活や仕事の時期を雪形(ゆきがた)や開花、渡り鳥や動物の出現を目安とする伝承が残っています。この素朴な暦が自然暦=旧暦です。農業や漁業との関連が深く、1年を通算せず、均等な1カ月もなく、必ずしも日数を数えないという特徴があります。年始は概ね決まっていますが確定していません。何月何日という認識もありません。

この旧暦を、暮らしとビジネスに活かす例を、繊維業界大手クラボウの元常務取締役小林弦彦さんが『旧暦はくらしの羅針盤』で示しています。繊維業界にとって天候予測は極めて重要です。彼は旧暦による天候予測の的中率7割以上をもって、ビジネスチャンスを得ていました。また、ヨットで世界周航した松村賢治さんは、月や星への関心から旧暦に興味を抱き、大阪南太平洋協会を設立。旧暦カレンダーを発行し、売上を南太平洋諸島の支援にあて、スローライフを取り戻そうと提唱しています。いま旧暦は自然回帰を志向する運動と結びついています。

### ◆雪形は郷土の山の掲げる美しい紋章

雪形【山腹に岩肌と積雪が織り成す模様を人が何かの形に見立てて名づけたものの総称】の名前は北海道から愛媛県まで431件あります。私のふるさとの信州・南アルプスの駒ヶ岳には白鳥と飛竜と称される雪形があります。白馬岳には代掻き(しろかき)馬、福島・吾妻小富士には種まきウサギなどの名前があり、季節の変化と農法とが結びついた自然暦です。ロマンチックな感じがあります。

「雪形は郷土の山の掲げる美しい紋章であり、新しい年の行く手を占う信頼厚い予言者である」と語ったのは雪形の研究者で山岳写真家の田淵行雄氏(1905~1989年)。安曇野と北アルプスを愛したナチュラルリストです。高度経済成長期に雪形への関心が薄れていく状況に対して田淵は、「わが国特有な民俗として郷土の山

を飾る紋章雪形が、その栄光の歴史を閉じようとしているばかりか、その栄光の伝統さえ人皆の心の中から消えようとしている」と嘆いていました。この田淵の作品、遺品などを展示する田淵行雄記念館が安曇野の地に1990年に開館しています。メルヘンチックな所です。また、4~5月にかけて雪形に関連したイベントが大町市を中心に行われています。国際雪形研究会もできており、国際的にリードできる研究領域となっています。

### ◆各地に伝わるいろいろな自然暦

自然の移ろいとともにある自然暦は各地にいろいろあります。石見地方では「山木蓮が咲くと靱蒔き、散ると田植え」、和歌山県潮岬では「ブリ漁はサツマイモの芽が二、三寸伸びた頃」、和歌山県古座では「麦が赤くなるとカツオが来る旬」、近畿地方では「鶯の声を聞いて苗代に種をまく」、長野県明科では「カッコウが鳴くから大豆をまく」、岡山県落合では「醍醐桜の満開の頃に靱種をまき、散り始めの頃にシイタケの樽木(ほたぎ)を起こして組む」と伝えられています。さらに、アマガエル、彼岸花、麦まき鳥(セキレイ、ミヤマガラス)、麦まきトンボ、田打ち桜があります。

### ◆中国からの暦の伝来

『魏志倭人伝』には自然暦で暮らしている日本人について「倭人は正歳四時(月の朔望と二十四節気)を知らず」「春耕秋収を記して年紀となす」と書かれています。システムチックな暦を使っていないことを後進性、野蛮性とみていました。日本には、4、5世紀に中国の暦が伝わりました。稲荷山古墳の太刀銘に辛亥(かのとい)年、隅田八幡宮の鏡銘に癸未(みずのとひつじ)年と刻まれています。巨大古墳の造営には統一された暦が必要だったことがわかります。『日本書紀』によると、6世紀中葉、欽明天皇の時代に暦博士が朝鮮半島から到来したと記述があります。602年、百濟僧・観勒(かんろく)が暦本をもって来朝しています。天智天

# 文化人類学者 中牧弘允氏の提言

吹田市立博物館館長・国立民族博物館名誉教授

自然暦は生活暦であり、1年を通算せず、均等な1ヶ月もなく、必ずしも日数を数えない。しかし季節の移ろいを経験によって把握する方法で、農業や漁業との関連が深く、素朴ではあるが日本の伝統を振り返るうえで意義深い、とする。

「ブリ漁はサツマイモの芽が二、三寸伸びた頃」、「麦が赤くなるとカツオが来る旬」、「カッコウが鳴くから大豆をまく」...

身近な景観や自然現象を総合的に認知する手法が自然暦なので、身近な太陽や月、それに星座すなわち星空を排除する必要は全くない

小林達雄氏の「縄文カレンダー」当初概念を活かしつつ「縄文ランドスケープ」論を考古天文学の領域に引き上げる。